

令和2年度

久留米市内遺跡群

秋成遺跡第3次調査

筑後国府跡第301次調査

筑後国府跡第303次調査（概要報告）

南薫本村遺跡第3次調査（概要報告）

市ノ上遺跡第3次調査（概要報告）

高三瀧遺跡第11次調査

久留米城外郭遺跡第26次調査

筑後国府跡第299次調査

筑後国府跡第300次調査

筑後国府跡第302次調査

令和3年（2021）3月
久留米市教育委員会

令和2年度

久留米市内遺跡群

秋成遺跡第3次調査

筑後国府跡第301次調査

筑後国府跡第303次調査（概要報告）

南薰本村遺跡第3次調査（概要報告）

市ノ上遺跡第3次調査（概要報告）

高三瀧遺跡第11次調査

久留米城外郭遺跡第26次調査

筑後国府跡第299次調査

筑後国府跡第300次調査

筑後国府跡第302次調査

令和3年（2021）3月
久留米市教育委員会

序

筑紫平野の中央に位置する久留米市は、九州最大の河川である筑後川と耳納山地の山並みに代表される水と緑が豊かな都市です。一方で、少子高齢化や高度情報化などの社会環境の変化に対応するために、本市では市民と行政がパートナーシップの理念の基に協働し、質の高い生活中心のまちづくりを推進しております。また、豊富な水と緑を活かした、歴史が見えるまちづくりを実現するため、歴史風土の継承に尽力しているところです。

この恵まれた環境と立地は、今日を生きる私たちだけでなく、先人の生活や社会・文化にも多大な影響を与えてきました。先人の足跡は、市内各所に存在する文化財として現代に残されています。

私ども教育委員会では、開発によって失われる、先人の残した貴重な文化財を後世に伝えて行くために、現状保存、あるいは発掘調査による記録保存などの措置を講じています。

今回、本書で報告するのは平成31・令和元年度から令和2年度に国費・県費補助を受けて発掘調査を実施した遺跡です。

本書が、地域史の研究や学習の一資料として、また文化財保護行政に対する理解と普及の一助として役立つことができれば幸いです。

末文となりましたが、発掘調査に際して多大なご協力とご理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

令和3年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 井上 謙介

例 言

1. 本書は、平成31・令和元年度から令和2年度に久留米市市民文化財保護課が国費・県費の補助を受けて実施した、久留米市の遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は久留米市教育委員会が主体となり、市民文化財保護課の江島伸彦と熊代昌之、小川原励、大隈彩未、長谷川桃子が発掘調査を担当した。
3. 本書に掲載した遺構実測図の測量は、調査担当者と発掘調査臨時職員（令和2年度は会計年度任用職員）の井上知義、江藤光男、大熊澄子、國武三歳、佐田農夫男、中村麻衣、日吉政勝、山口誠也、山田治代が行った。
4. 遺物実測は、各調査担当者と会計年度任用職員の宮崎彩香・今村理恵、江口内織が行った。拓本作成は、各調査担当者が行った。
5. 遺構と遺物の製図作業は、各調査担当者と宮崎、今村がAdobe製「Adobe Illustrator」を用いて行った。
6. 遺構写真は、各調査担当者が撮影した。使用したカメラの機種は、Canon EOS 5D Mark IVもしくはCanon 6D Mark IIである。調査区の全景写真は秋成遺跡第3次調査のみ有限会社空中写真企画に委託して撮影し、その他の遺跡は各調査担当者が撮影した。
7. 遺物写真は、久留米市埋蔵文化財センターにおいて、各調査担当者が撮影した。使用したカメラの機種は、PENTAX K-1 IIである。
8. 本書に掲載している遺構図は、国土調査法第II座標系（世界測地系）を基に作成した。図版の方位は全て座標北を示す。なお、平成28年の熊本地震に伴うパラメータ補正は行っていない。
9. 本書に使用した遺構標記は下記の略号による。
S D…溝 S E…井戸 S F…道路遺構 S I…竪穴建物
S K…土坑 K…喪棺墓 S P…ピット S X…不明遺構
10. 遺構番号は、調査毎に付した。
11. 本文中と実測図、写真図版の遺物番号は同一である。
12. 遺物観察表の凡例は以下の通りである。
 - ・ 法量の単位は cm である。（）は復元値あるいは残存値を、－は欠損または該当する部位が無いことを示す。
 - ・ 色調は『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社）に拠った。
 - ・ 胎土に含まれる砂粒は大きさに応じて、0.5mm 未満を「微砂粒」、1mm 未満を「細砂粒」、1mm 以上を「砂粒」とした。
 - ・ 登録番号は、久留米市市民文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

(例) 201901 - 000001

調査番号 登録番号

13. 調査の報告書掲載順については、調査要因を「個人住宅本調査」と「各種開発確認調査」に分けて掲載した。
14. 本書に収録した遺物及び調査に係わる記録類は、全て久留米市埋蔵文化財センターにおいて、収蔵・保管され、活用される。
15. 本書の執筆は各調査担当者が行い、文責は本文目次及び文末に記した。全体の編集は、大隈が行った。

本文目次

I. はじめに	(大隈) 1
【個人住宅本調査】	
II. 秋成遺跡第3次調査	(大隈) 3
III. 筑後国府跡第301次調査	(江島) 21
IV. 筑後国府跡第303次調査(概要報告)	(大隈) 26
V. 南薫本村遺跡第3次調査(概要報告)	(江島) 27
VI. 市ノ上遺跡第3次調査(概要報告)	(熊代) 28
【各種開発確認調査】	
VII. 高三瀧遺跡第11次調査	(小川原) 29
VIII. 久留米城外郭遺跡第26次調査	(小川原) 35
IX. 筑後国府跡第299次調査	(長谷川) 42
X. 筑後国府跡第300次調査	(長谷川) 46
XI. 筑後国府跡第302次調査	(大隈) 54
[巻末] 抄録	58

挿図目次

【個人住宅本調査】

II. 秋成遺跡第3次調査

第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図(1/25,000)	5	第14図 S D 1 完掘状況(西から)	15
第2図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)	5	第15図 S I 7 カマド断面状況(東から)	16
第3図 遺構配置図(1/100)	6	第16図 S I 7 完掘状況(南から)	16
第4図 調査区東壁・北壁土層断面図(1/40)	7	第17図 S I 16 床面検出状況(南から)	16
第5図 S D 1 実測図(1/40)	8	第18図 S I 16 完掘状況(南から)	16
第6図 S I 7 実測図・土層断面図(1/40)	9	第19図 S I 27 床面検出状況(西から)	16
第7図 S I 16 実測図・土層断面図(1/40)	10	第20図 S I 27 完掘状況(西から)	16
第8図 S I 27 実測図・土層断面図(1/50)	11	第21図 S I 57 完掘状況(北から)	16
第9図 S I 57・S X 26 実測図(1/40)	12	第22図 S X 26 完掘状況(南西から)	16
第10図 出土遺物実測図(1/4・1/2)	13	第23図 出土遺物写真1	17
第11図 調査区全景(南から)	15	第24図 出土遺物写真2	18
第12図 調査区上空から耳納北麓を望む(北東から)	15	第25図 出土遺物写真3	19
第13図 調査区上空から筑後川を望む(南東から)	15	第26図 出土遺物写真4	20

Ⅲ. 筑後国府跡第 301 次調査

第 27 図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000) ……22	第 31 図 出土遺物実測図 (1/2) ……25
第 28 図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) ……22	第 32 図 調査区東側全景 (北西から) ……25
第 29 図 調査区東壁土層断面図 (1/60) ……24	第 33 図 調査区西側全景 (北西から) ……25
第 30 図 遺構配置図 (1/100) ……25	第 34 図 出土遺物写真 ……25

Ⅳ. 筑後国府跡第 303 次調査 (概要報告)

第 35 図 調査地点の位置図 (1/25,000) ……26	第 37 図 南区調査区全景 (北から) ……26
第 36 図 北区調査区全景 (南から) ……26	

Ⅴ. 南薫本村遺跡第 3 次調査 (概要報告)

第 38 図 調査地点の位置図 (1/25,000) ……27	第 40 図 S 1 10 全景 (南東から) ……27
第 39 図 調査区全景 (南から) ……27	

Ⅵ. 市ノ上遺跡第 3 次調査 (概要報告)

第 41 図 調査地点の位置図 (1/25,000) ……28	第 42 図 調査区全景 (南東から) ……28
---------------------------------	--------------------------

【各種開発確認調査】

Ⅶ. 高三瀬遺跡第 11 次調査

第 43 図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000) ……29	第 48 図 高三瀬遺跡第 5・11 次調査 主要遺構図 (1/200) ……33
第 44 図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) ……30	第 49 図 K 1 検出状況 (南から) ……34
第 45 図 遺構配置図 (1/50) ……31	第 50 図 K 1 完掘状況 (南から) ……34
第 46 図 K 1 実測図 (1/20) ……31	第 51 図 出土遺物写真 ……34
第 47 図 出土遺物実測図 (1・2 は 1/8、3～5 は 1/4) ……32	

Ⅷ. 久留米城外郭遺跡第 26 次調査

第 52 図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000) ……35	第 58 図 出土遺物実測図 (1/4) ……39
第 53 図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) ……36	第 59 図 調査区全景 (北から) ……40
第 54 図 『延寶八年久留米市街図』 (縮尺任意 赤丸が調査地) ……37	第 60 図 S D 2 西部土層堆積状況 (東から) ……40
第 55 図 『天保年間久留米城下図』 (縮尺任意 赤丸が調査地) ……37	第 61 図 S D 2 東部土層堆積状況 (西から) ……40
第 56 図 遺構配置図 (1/100) ……37	第 62 図 S K 1 土層堆積状況 (東から) ……40
第 57 図 S D 2、S K 1・3 土層断面図 (1/20) ……38	第 63 図 S K 3 土層堆積状況 (北から) ……40
	第 64 図 出土遺物写真 ……41

IX. 筑後国府跡第 299 次調査

第 65 図	調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500) ……42	第 69 図	S D 1 土層断面 (南東から) ……45
第 66 図	遺構配置図 (1/50) ……43	第 70 図	S D 1 完掘状況 (南東から) ……45
第 67 図	S D 1・2・3 遺構断面図 (1/40) ……44	第 71 図	S D 2 完掘状況 (南東から) ……45
第 68 図	調査区全景 (東から) ……45	第 72 図	S D 3 完掘状況 (南東から) ……45

X. 筑後国府跡第 300 次調査

第 73 図	遺構配置図 (1/100) ……47	第 80 図	調査区全景 (西上空から) ……52
第 74 図	S D 4・5、S F 1 土層断面図、 P 2～4・8～9 実測図 (1/40) ……48	第 81 図	S F 1 検出状況 (西から) ……52
第 75 図	出土遺物実測図 (5:1/2、それ以外は 1/4) ……49	第 82 図	S F 1 土層断面 (西から) ……52
第 76 図	S F 1 波板状圧痕出土遺物の大きさと種類 ……50	第 83 図	S D 4・5 土層断面 (東から) ……52
第 77 図	S F 1 波板状圧痕別の遺物の割合 ……50	第 84 図	S D 2 土層断面 (西から) ……52
第 78 図	S F 1 波板状圧痕別の遺物の大ききの割合 ……50	第 85 図	S F 1 波板状圧痕完掘状況 (北西から) ……53
第 79 図	第 22 次調査・第 300 次調査 主要遺構配置図 (1/400) ……51	第 86 図	出土遺物写真 ……53

XI. 筑後国府跡第 302 次調査

第 87 図	遺構配置図 (1/100) ……54	第 90 図	主要遺構合成図 (1/600) ……56
第 88 図	土層断面模式図 ……55	第 91 図	調査区全景 (東から) ……57
第 89 図	出土遺物実測図 (1/4) ……55	第 92 図	出土遺物写真 ……57

表目次

第 1 表	『令和元・2 年度 久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表 …… 1
第 2 表	(秋成遺跡第 3 次調査) 出土遺物観察表 …… 14
第 3 表	(高三瀨遺跡第 11 次調査) 出土遺物観察表 …… 32
第 4 表	(久留米城外郭遺跡第 26 次調査) 出土遺物観察表 …… 39
第 5 表	(筑後国府跡第 300 次調査) 出土遺物観察表 …… 49
第 6 表	(筑後国府跡第 300 次調査) S F 1 波板状圧痕遺物一覧表 …… 50
第 7 表	(筑後国府跡第 302 次調査) 出土遺物観察表 …… 55

I. はじめに

1. 令和元・2年度実施調査の概要

久留米市では、平成5年度より市内遺跡発掘調査等補助事業によって発掘調査を実施した遺跡について、『久留米市内遺跡群』として成果を取りまとめ、報告書を毎年刊行している。

令和2年度の市内遺跡発掘調査等補助事業による調査は、令和3年2月1日現在で8件である。調査原因は個人住宅本調査は個人住宅建設が5件、各種開発確認調査は5件ある。

本年度の報告書は、令和元年度に実施した秋成遺跡第3次調査と高三藩遺跡第11次調査と、令和2年度に実施した筑後国府跡第299～301次調査の本報告と、令和2年度に実施した筑後国府跡第303次調査、南薫本村遺跡第3次調査、市ノ上遺跡第3次調査の概要報告を掲載した。報告書作成に係わる整理作業は、西町発掘調査整理事務所において実施した。

第1表 『令和元・2年度久留米市内遺跡群』掲載遺跡一覧表

調査年度	調査番号	遺跡名	調査回数	調査期間	調査面積	担当者	調査原因	遺跡略記号	備考
R元	201912	秋成遺跡	3	20200203～20200306	67㎡	大隈彩未	個人住宅本調査	AKN-003	本報告
R2	202009	筑後国府跡	301	20200728～20200807	40㎡	江島伸彦		TKH-301	本報告
R2	202011	筑後国府跡	303	20200901～20200916	170㎡	大隈彩未		TKH-303	概要報告
R2	202013	南薫本村遺跡	3	20200831～20200905	74㎡	江島伸彦		NKH-003	概要報告
R2	202014	市ノ上遺跡	3	20201020～20201021	21㎡	熊代昌之		ICN-003	概要報告
R元	201911	高三藩遺跡	11	20191203～20191217	3.5㎡	熊代昌之 小川原助	各種開発確認調査	TMZ-011	本報告
R2	202003	久留米城外郭遺跡	26	20200424～20200430	22㎡	小川原助		ENG-026	本報告
R2	202005	筑後国府跡	299	20200527～20200529	19㎡	長谷川桃子		TKH-299	本報告
R2	202008	筑後国府跡	300	20200720～20200807	62㎡	長谷川桃子		TKH-300	本報告
R2	202010	筑後国府跡	302	20200803～20200807	20㎡	大隈彩未		TKH-302	本報告

2. 調査の体制

平成31・令和元年及び令和2年度の久留米市内遺跡群発掘調査等国庫補助事業に係わる調査の体制は、以下のとおりである。

1. はじめに

調査主体：久留米市教育委員会 教 育 長：大津 秀明（平成31・令和元年度）
井上 謙介（令和2年度）
調査総括：久留米市市民文化部 部 長：宮原 義治（平成31・令和元年度）
竹村 政高（令和2年度）
文化芸術担当部長：竹村 政高（平成31・令和元年度）
次 長：西村 信二
文化財保護課 課 長：水島 秀雄
課長補佐：久保田 由美
課長補佐兼主査：白木 守 丸林 禎彦
主 査：水原 道範
事務主査：塚本 映子（平成31・令和元年度）
小澤 太郎
事前確認・調整担当：小澤 太郎 熊代 昌之
江島 伸彦（令和2年度）
埋蔵文化財センター担当：水原 道範
発掘調査・報告書作成担当：江島 伸彦 熊代 昌之 小川原 励
大隈 彩未 長谷川 桃子
整理担当：米澤 美詠子 宮崎 彩香 今村 理恵
（平成31・令和元年度：専任非常勤職員、
令和2年度：会計年度任用職員）

発掘調査作業員

令和元年度（臨時職員）

案納 哲夫 國武 三歳 柳 鈴子 山田 治代 横山 満浩

令和2年度（会計年度任用職員）

青木 佐智子 秋永 絹子 石橋 康子 井上 知義 一木 清孝 江藤 光男
鐘江 清 川原 初美 國武 三歳 久保田 英嗣 佐田 農夫男 進上 裕永
高尾 春代 田中 樹子 田中 とし子 中村 麻衣 日吉 政勝 藤木 幸子
堀江 俊文 本多 正好 松尾 朱美 丸山 幸 本村 美奈子 柳 鈴子
矢野 崇徳 山口 誠也 山田 治代 横山 満浩 渡辺 しげ子

出土品整理作業臨時職員

令和2年度（会計年度任用職員）

石崎 玲子 井上 千恵美 江口 里織 梶島 かおり

個人住宅本調査

II. 秋成遺跡第3次調査

1. 調査に至る経緯

本調査は専用住宅建設に伴う事前の発掘調査である。令和元年9月5日、土地所有者より代理人を通じて久留米市田主丸町秋成字鬼杉1291-3における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である秋成遺跡の範囲内に含まれている。本調査地の東方には国道210号浮羽バイパスが東西に走っており、道路建設に伴う発掘調査が実施されている。同年12月4日の試掘確認調査を行った際にも地表下0.9mで遺構を確認し、開発予定の基礎構造上、遺跡の現状保存が不可能であったことから、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。令和2年1月7日に土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年2月3日から3月6日まで現地での発掘調査を実施した。対象面積367㎡のうち、調査面積は67㎡である。

2. 位置と環境

久留米市田主丸町は、筑後川中流域の左岸、久留米市の東部に位置する。田主丸町周辺の地形は、河川流域の平野部と、耳納連山の麓に発達する扇状台地部、山腹から分水嶺までの山塊部の3つに大別できる。そのうち、遺跡の分布域は平野部と山麓の2つに大きく分けられることが指摘されている^(註1)。平野部では、美津留川、古川、巨瀬川周辺の自然堤防上に遺跡が集中する。主に弥生時代から中世にかけて遺跡が多く確認されている。山麓では、標高40m前後の扇状台地上に遺跡の分布が集中する傾向にある。

美津留川周辺では、平成3年から県営圃場整備事業に伴い田主丸町教育委員会及び吉井町教育委員会によって発掘調査が実施されたほか、平成5年から国道210号浮羽バイパス建設に伴う発掘調査が福岡県教育委員会によって実施されている。田主丸町の中では、大規模な開発によって発掘調査が数多く行われている地区である。縄文時代晩期から奈良時代の集落が確認されており、千代久遺跡や船越高原遺跡、鷹取五反田遺跡、船越一ノ上遺跡、船越二ノ上遺跡、船越宮ノ前遺跡などの遺跡が調査されている。

縄文時代については、千代久遺跡で後期から晩期の埋葬が計8基確認されている。それ以外に住居や柱などの明確な生活施設は確認されていないが、石錘や打製石斧、十字形石製品が出土している。

弥生時代については、水分遺跡で前期から中期初頭の貯蔵穴と考えられる土坑群が確認されている。美津留川周辺では前期の生活痕跡は確認されていないが、中期に入ると集落が確認されるようになる。船越一ノ上遺跡は美津留川右岸の微高地上に位置し、中期から後期後半の集落跡と小型の甕棺墓15基が確認されている。須玖式段階併行期と考えられており、竪穴建物は隅丸長方形を呈

するものが大半を占める。うきは市吉井町の鷹取五反田遺跡では、中期後半から後期前半の集落跡が広がる。あわせて、約20mにわたって列状に並ぶ甕棺墓群が確認されており、居住域と墓域を伴うことが判明している。水分遺跡では後期後半から古墳時代初頭の二重区画溝を伴う集落が確認され、拠点集落であることが指摘されている。また、大的遺跡では後期から古墳時代前期の水田痕が検出され、継続的な稲作が行われていたことが分かっている。

古墳時代に関しては、千代久遺跡や船越高原遺跡、玉田遺跡などで前期の集落が確認されている。中期には集落がやや少なくなるが、後期になると集落が急増しており、船越宮ノ前遺跡や船越一ノ上遺跡、船越二ノ上遺跡、船越高原遺跡が確認されている。6世紀中頃から7世紀前半には、耳納山麓に群集墳が築造されている。益生田古墳群では消滅分を含めて125基、森部平原古墳群では70基が確認されている。

承平年間（931～938）に編纂された『和名類聚抄』によると、筑後国は10郡からなり、そのうち田主丸町は竹野郡にあたる。耳納山麓沿いの竹野地区には、「字竹野屋敷」の地名が残る田主丸町竹野三明寺に竹野郡衙があったと推定されている。竹野郡は柴刈郷・二田郷・竹野郷・長柄郷・船越郷・川会郷の6郷が存在していたと記載されている。船越宮ノ前遺跡や船越高原遺跡、船越二ノ上遺跡で確認された古墳時代後期の集落は、奈良時代まで遺構が確認されており、船越高原遺跡では籬の羽口や鉄滓が出土している。

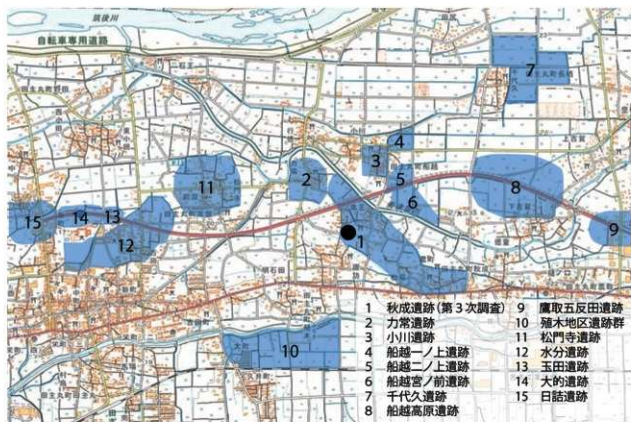
中世においては、小川遺跡とされる一帯が、室町時代の豪族である小川氏の居館跡とされている。

今回の調査地が位置する秋成遺跡は、美津留川の自然堤防上に位置しており、弥生時代から鎌倉時代までに及ぶ複合遺跡である。携帯電話鉄塔建設に伴う第1次調査では、弥生時代中期～後期の竪穴建物や後期後半の小児棺、8世紀以降の溝が検出されている。国道210号浮羽バイパス建設に伴う第2次調査では、弥生時代中期から鎌倉時代までに及ぶ集落が確認された。弥生時代中期を中心とする竪穴建物群が確認されたほか、奈良時代の竪穴からは転用硯や製塩土器が出土し、船越郷との関連性が指摘されている。それに加えて、中世の石組みの墓や土坑が検出されていることから、小川氏居館跡との関連性も示唆されている。また、本調査地点より250m西に位置する秋成亀王遺跡では、須玖式の甕棺墓が畑地の耕作中に不時発見されている。合口式の甕棺で、外面に黒色顔料を塗布している。船越一ノ上遺跡の弥生時代中期から後半にかけて営まれた集落に伴う墓域と推定されている。

〔注1〕 栗原和彦編 1984 『田主丸古墳群 福岡県浮羽郡田主丸町所在群集墳の調査』田主丸町文化財調査報告書第1集

【参考文献】

- 丸林禎彦編 2001 『田主丸大塚古墳』福岡県浮羽郡田主丸町所在の古墳の史跡範囲確認調査報告 田主丸町文化財調査報告書第15集 田主丸町教育委員会
- 江島伸彦編 2012 『秋成遺跡—第2次調査—』国道210号浮羽バイパス関係発掘調査報告（2）久留米市文化財調査報告書第309集 久留米市教育委員会



第1図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

3. 調査の記録

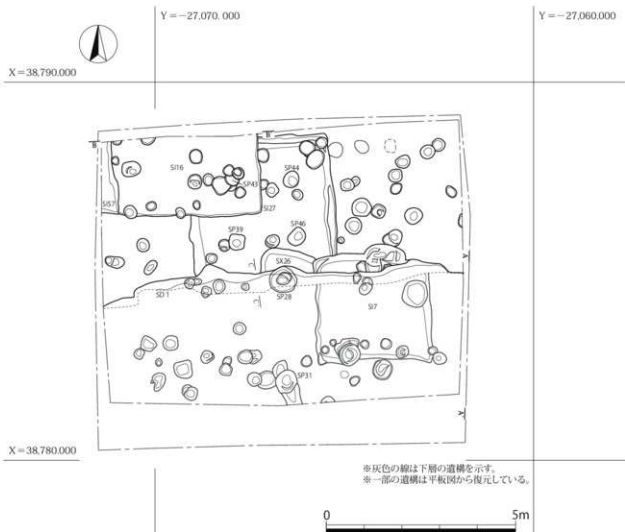
(1) 調査の経過

今回の発掘調査は、弥生時代から中世の遺構の広がりを確認する為に行った。令和2年2月3日から重機による表土剥ぎを実施した。翌4日の午後から遺構検出と平板測量、遺構の掘り下げを行った。3月3日にドローンを用いて調査区の空中写真を撮影し、追加の調査を行った。同月5・6日に重機による埋め戻しと器材の撤収を行い、同月6日に現地での発掘調査を終了した。

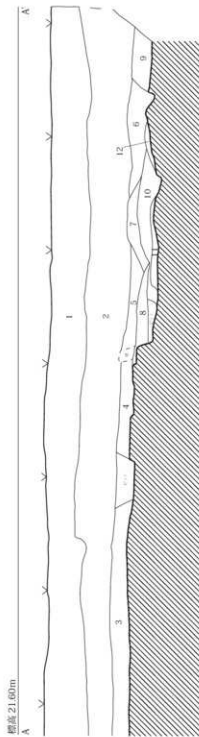
遺構の測量は、トータルステーションを、データの編集と保存は株式会社CUBIC製ソフト「遺構くんcubic」を使用した。

(2) 基本層序(第4図)

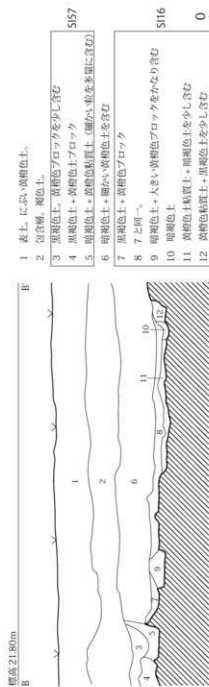
調査区東壁の層序は、にぶい黄橙色土が約30～50cm(第1層)、その下に褐色土25～60cm(第2層)、黄褐色土の粒を含む暗褐色土層(第6層)が約20cm堆積している。地表から80～90cmで遺構面に達した。地山は黄橙色土である。



第3図 遺構配置図(1/100)



- 1 表土。にぶい、黄褐色。
 2 包合層。褐色土。
 3 暗褐色土。黄褐色土の粒を含む。
 4 暗褐色土。
 5 黒褐色土。黄褐色土の粒を含む。褐色土プロックを含む。
 6 黒褐色土。黄褐色土の粒を含む。褐色土プロックを含む。
 7 黒褐色土。黄褐色土プロックを含む。
 8 黒褐色土。粘土を多量に含む。灰黄褐色土プロックを含む。
 9 暗褐色土。黄褐色土の粒を含む。
 10 黒色土。粘土を少量含む。2cm 人の暗褐色土・黄褐色土プロックを含む。
 11 黒色土。1~5cm 人の黄褐色土プロックを多く含む。
 12 暗褐色土。黄褐色土の粒をわずかに含む。



- 1 表土。にぶい、黄褐色土。
 2 包合層。褐色土。
 3 黒褐色土。黄褐色土プロックを少し含む
 4 黒褐色土。黄褐色土プロック
 5 暗褐色土。黄褐色粘質土。(層が、粘土を多量に含む)
 6 暗褐色土。細かい黄褐色土を含む
 7 黒褐色土。黄褐色土プロック
 8 7と同じ。
 9 暗褐色土。大きい黄褐色土プロックをかなり含む
 10 暗褐色土。
 11 黄褐色土粘質土。暗褐色土を少し含む
 12 黄褐色粘質土。黒褐色土を少し含む

第4図 調査区東壁・北壁土層断面図 (1/40)

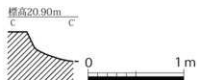
(3) 検出遺構

今回の調査では、溝1条、竪穴建物4軒、ビット多数を検出した。調査区の南側は表土剥ぎの際に掘り下げすぎてしまったため、検出した遺構のほかにも遺構があった可能性が非常に高い。以下、遺構の詳細について述べる。

溝

S D 1 (第3・5・14図)

調査区中央部で検出された東西方向に走る溝である。S I 7・27・S X 26・S P 28に後出する。残存部は、幅0.46m、深さ0.3mを測る。断面形は楕円を呈すると想定される。埋土には多量の焼土を含む。土師器の甕や坏、須恵器の坏などが出土しており、7世紀後半～末に属する。



第5図 S D 1断面図 (1/40)

竪穴建物

S I 7 (第3・6・15・16図)

調査区東部で検出された竪穴建物である。平面プランは隅丸正方形を呈する。長軸長は3.0m、短軸長は2.9m、深さは最深0.38mを測る。埋土は暗褐色土を主体として、部分的に焼土の塊を含む。主柱穴や貼床は認められず、黄褐色の地山が床面となる。主軸方位は真北である。

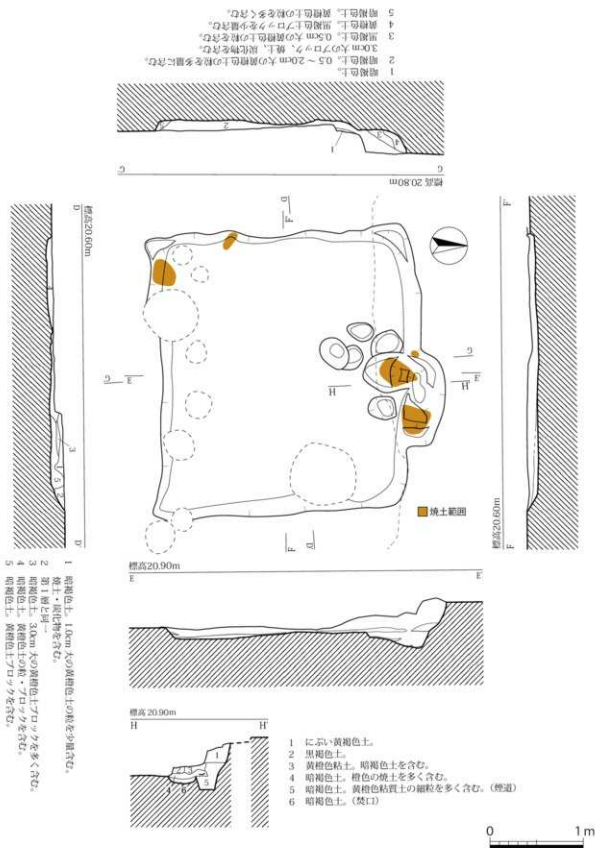
カマドが北壁に付設されているが、袖部は破壊されており、壁面に焼土が若干確認されるのみである。焚き口の幅は0.38mで、灰層が。支脚の抜き跡が2箇所確認されており、直径0.25mを図る。遺物は、竪穴建物の埋土から土師器の甕や坏、高坏、須恵器の坏など、カマドの埋土から土師器や須恵器に加えて、鉄鏝や鉄滓が出土した。出土遺物の時期から7世紀後半～8世紀初頭に属する。カマドからは6世紀後半～末の須恵器の坏身が出土している。

S I 16 (第3・7・17・18図)

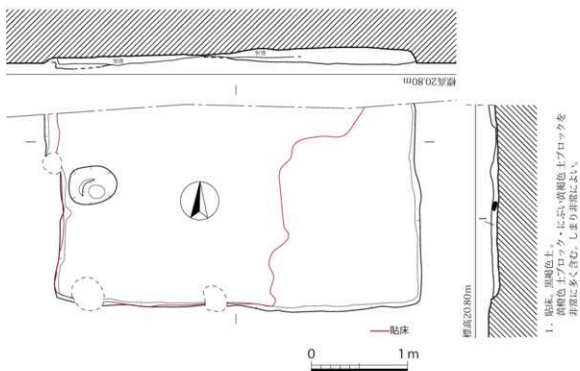
調査区北部で検出された竪穴建物である。切り合い関係から、S I 57に先行し、S I 27に後出する。遺構の北端は、調査区の外に延びる。長軸長は残存部で2.7m、短軸長は3.84m、深さ17cmを測る。平面形プランは、正方形を呈すると想定される。埋土は黒褐色土を主体とする。貼床が確認されており、黒褐色土を主体とし、黄褐色土やにぶい黄褐色土のブロックを多く含む。遺構の中央部から西部にかけて確認されており、厚さは10cmである。主柱穴は確認されていない。主軸方位はN-1.2°-Eである。遺物は土師器の坏や甕、須恵器の坏、鉄滓が出土した。7世紀後半に属する。

S I 27 (第3・8・19・20図)

調査区北部で検出された竪穴建物である。切り合い関係からS D 1・S I 16・27・S X 26に先行する。縦幅は3.56m、横幅は3.84m、深さ20cmを測る。平面プランはほぼ正方形を呈する。埋土は、黒褐色土を主体とし、黄褐色土のブロックを多く含む。貼床が遺構全面で確認されており、厚さは5～10cmである。主柱穴が遺構の中央部で4本検出されており、S P 39・43・44・



第6図 S17実測図・土層断面図(1/40)



第7図 SI 16 実測図・土層断面図 (1/40)

46はそれに該当する。柱間は芯心間で東西1.54m、南北1.64mを測る。主軸方位はN-6.34°-Wである。遺物は土師器の甕・環・高環や須恵器の甕・壺・環が出土しており、7世紀中頃～後半に属する。

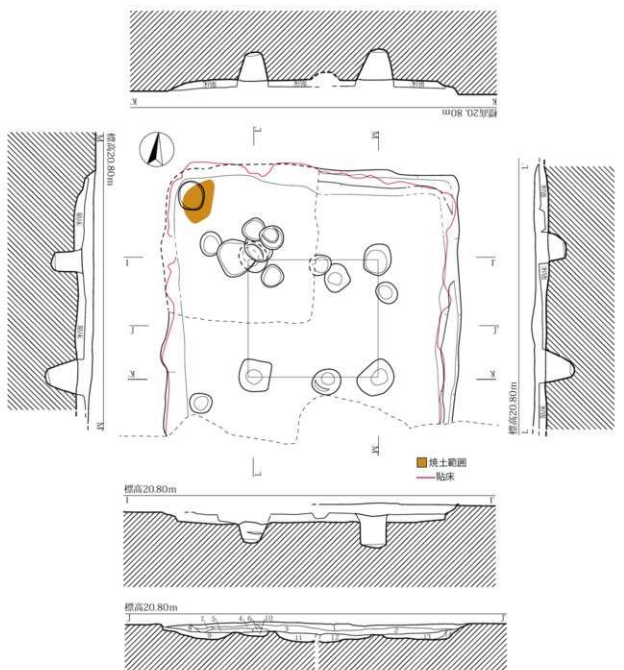
SI 57 (第3・9・21 図)

調査区北西隅で検出された竪穴建物である。切り合い関係からSI 16に後出する。遺構の大半が調査区に延びており、平面プランは不明である。遺構の規模は、残存部分で長さ1.8m、幅0.44m、深さ15cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物は土師器の細片が出土しているが、時期確定には至らなかった。遺構の先後関係から7世紀後半以降のものと考えられる。

不明遺構

SX 26 (第3・9・22 図)

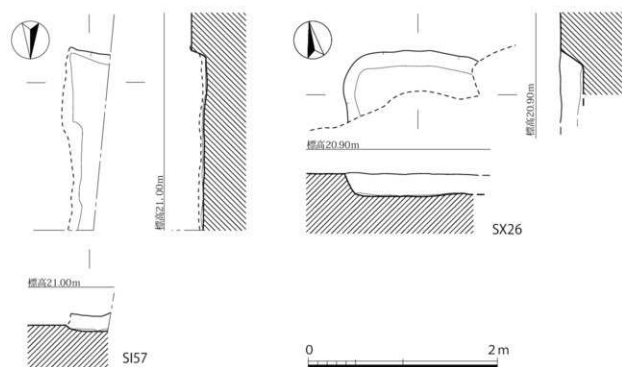
調査区中央部で検出された遺構である。SD 1およびSI 7に先行する。遺構の大半が削平されており、平面プランは不明である。残存部分は、縦幅0.42m、横幅1.43m、深さ0.22mを測る。埋土は黒褐色土である。床面は非常に硬化している。遺物は土師器の甕や環、須恵器の甕や環が出土しており、7世紀後半に属する。表土剥ぎの際に掘り下げすぎた竪穴建物の一部である可能性も考えられる。



- 1 黒褐色土。
- 2 黒褐色土。1.0～2.0cm 大の暗褐色土・黄褐色土・黒色土ブロックを多量含む。しまりとても良い。
- 3 黒褐色土。黄褐色土の粒、焼土を含む。
- 4 黒褐色土。2.0cm 大のにぶい黄褐色土ブロックを含む。
- 5 黒褐色土。黄褐色土の粒、焼土を少し含む。
- 6 黒褐色土。黄褐色土・にぶい黄褐色土の粒を多く含む。
- 7 黒色土。焼土・1.0cm 大のにぶい黄褐色土ブロックを少し含む。
- 8 黒褐色土。2.0cm 大の黄褐色土ブロック、焼土、炭化物を多量含む。
- 9 黒褐色土。黄褐色ブロックを含む。
- 10 黒褐色土。黄褐色ブロックを含む。
- 11 黒褐色土。黄褐色ブロックを含む。
- 12 黒褐色土。黄褐色ブロックを含む。
- 13 黒褐色土。
- 14 黄褐色粘質土・黒褐色土。

0 3m

第8図 S127 実測図・土層断面図(1/50)

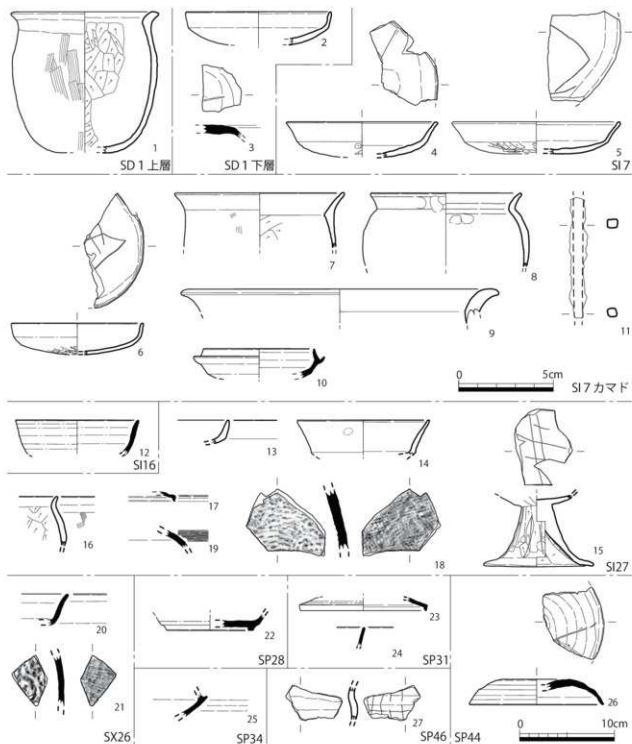


第9図 S I 57・S X 26 実測図 (1/40)

(4) 出土遺物 (第10・23～26図・第2表)

今回の調査では、パンコンテナー1箱分の遺物が出土した。主な遺物として、古代の土師器や須恵器、鉄製品が挙げられる。詳細については第2表を参照されたい。

1はSD1上層から出土した土師器の甕である。口径が最大径となり、15.6cmを測る。2・3は、SD1下層から出土した。2は土師器の環である。3は須恵器の环蓋で、外面にヘラ記号が施されている。4・5はS I 7の埋土から出土した土師器の環である。ともに底部は手持ちヘラケズリが施されており、内面にはヘラ記号が認められる。6～11はS I 7のカマドから出土した。6は土師器の環で、4・5と同様に底部には手持ちヘラケズリが施されており、内面にはヘラ記号が認められる。口縁部がやや直立気味である。7～9は土師器の甕である。10は須恵器の坏身で、口縁部にかえしを持つ。11は鉄鐏の茎部である。12はS I 16から出土した須恵器の坏身である。13～19はS I 27の遺物で、13・15・16・18は床面から出土した。13は土師器の環である。14・15は土師器の高環である。14は高環の坏部片で、口縁はやや外反している。15は坏部内面にヘラ記号が施され、脚筒部は上方向へのヘラケズリ後にヘラ記号が施されている。16は土師器の甕、17は須恵器の环蓋である。18は須恵器の甕で、外面はタタキの後に一部すり消されており、内面には青海波の当て具が使用されている。19は須恵器の壺で、外面にカキ目が施されている。20・21はS X 26から出土した須恵器である。20は坏身である。21は甕の胴部片で、外面はタタキ後に一部すり消されており、内面は青海波の当て具が使用されている。22はS P 28から出土した須恵器の坏身で、高台を持つ。23・24はS P 31から出土した遺物で、ともに須恵器である。23は嘴状の口縁部を持つ环蓋である。24は坏身の口縁部片である。25はS P 34から出土した須恵



第10図 出土遺物実測図(1/4・1/2)

器の坏身でかえしをもつ。26はS P 44から出土した須恵器の坏蓋である。外面にヘラ記号が施されている。焼成不良で、焼成歪みが生じている。27はS P 46から出土した土師器の壺である。外面に格子状のヘラ記号が施されている。

【参考文献】

大庭孝夫 2005 「3. 堂畑遺跡周辺における7世紀後半～8世紀末の土師器の変遷」『堂畑遺跡Ⅲ 福岡県うきは市吉井町新治所在遺跡の調査 下巻』一般道国道210号浮羽バイパス関連埋蔵文化財調査報告 第23集 福岡県教育委員会

第2表 出土遺物観察表

遺物 番号	出土 遺構	材質	器種	正装				色装				敷土	備考	発掘 番号
				口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	外面	内面	外面	内面				
1	S01 遺1000	土師器	甕	15.0	—	14.0	楕	に深い溝	ハケ目 織ナデ	—	ヘラケズリ	横説。1mm大粒を含む。	スス付着	201912 000001
2	S01 遺1000	土師器	埴	15.0	—	13.5	楕	—	回転ナデ	ナデ	—	良好。赤色粒子を含む。	—	201912 000004
3	S01 遺1000	美濃器	杯蓋	—	—	11.0	円オリーブ	仄	—	ヘラケズリ	—	良好。0.3mm大粒子を含む。	外面底部にヘラ記号	201912 000006
4	S07 遺1000	土師器	埴	16.0	—	13.7	楕	明赤黒	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。面付を含む。	内面にヘラ記号	201912 000012
5	S07 遺1000	土師器	埴	17.8	—	13.0	明赤黒	楕	—	回転ナデ	ナデ	横説。	内面にヘラ記号	201912 000013
6	S07 遺1000	土師器	埴	14.0	—	13.0	黒	明赤黒	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。0.5～1.0mm大の 粒を少量含む。	—	201912 000024
7	S07 遺1000	土師器	甕	18.0	—	13.0	楕	楕	ナデ	ナデ	ナデ	横説。1mm大の粒。面 付を含む。	—	201912 000048
8	S07 遺1000	土師器	甕	16.0	—	17.7	明赤黒	明赤黒	ナデ	ナデ	ナデ	横説。1mm大の粒を含む。	—	201912 000023
9	S07 遺1000	土師器	甕	13.0	—	13.0	楕	楕	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	1mm大の白色粒子を含む。	—	201912 000019
10	S07 遺1000	美濃器	杯蓋	11.0	—	13.1	円	—	回転ナデ	回転ナデ	—	横説。1～4mm大の粒 を含む。	—	201912 000020
11	S07 遺1000	新製法 カマド	竈	8.6	1.0	0.5	—	—	—	—	—	—	—	201912 000021
12	S110 遺1000	美濃器	埴	13.0	—	13.0	に深い溝	に深い溝	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。1mm大の粒を含む。	—	201912 000030
13	S27 遺1000	土師器	埴	—	—	12.5	楕	楕	ナデ	ナデ	ナデ	横説。赤色粒子を含む。	—	201912 000049
14	S27 遺1000	土師器	高埴	14.0	—	13.7	楕	浅凹楕	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。	面付あり	201912 000038
15	S27 遺1000	土師器	高埴	—	(11.7)	17.0	楕	楕	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。赤色粒子を含む。	外面内面及び器蓋内 面にヘラ記号	201912 000048
16	S27 遺1000	土師器	甕	—	—	13.2	黒	明赤黒	ナデ	ナデ	ナデ	良好。1～2mm大の粒 を含む。	—	201912 000045
17	S27 遺1000	美濃器	杯蓋	—	—	11.0	仄	仄	回転ナデ	回転ナデ	—	1mm大の粒を含む。	—	201912 000044
18	S27 遺1000	美濃器	甕	—	—	16.4	赤仄	赤仄	タタキ すけ削し	タタキ	タタキ	横説。	—	201912 000051
19	S27 遺1000	美濃器	甕	—	—	11.5	仄	仄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。1～2mm大の粒 を含む。	—	201912 000036
20	SX26 遺1000	美濃器	杯蓋	—	—	13.0	仄	仄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。1mm大の粒を含む。	—	201912 000034
21	SX26 遺1000	美濃器	甕	15.0	11.1	0.6	仄	仄	タタキ すけ削し	タタキ	タタキ	横説。1mm大の粒を含む。	—	201912 000035
22	SF28 遺1000	美濃器	埴	10.1	17.1	—	仄	仄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	2mm大の白色粒子を含む。	—	201912 000055
23	SF31 遺1000	美濃器	杯蓋	13.0	—	11.4	仄	仄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。0.5～1.0mm大の 白色粒子を含む。	—	201912 000027
24	SF31 遺1000	美濃器	杯蓋	—	—	11.90	青仄	青仄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。1mm大の粒を含む。	—	201912 000026
25	SF34 遺1000	美濃器	杯蓋	—	—	12.43	仄	仄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。0.5mm大の粒を 含む。	—	201912 000060
26	SF44 遺1000	美濃器	杯蓋	14.2	17.0	2.7	仄	仄	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。	焼成不良。焼きあがり。 内面にヘラ記号	201912 000067
27	SF46 遺1000	土師器	甕	—	—	13.0	楕	楕	回転ナデ	回転ナデ	ナデ	横説。面付を含む。	内面にヘラ記号	201912 000068

4. 総括

秋成遺跡は、弥生時代中期～鎌倉時代の遺構が確認されている複合遺跡である。今回の調査では、古代の溝1条、竪穴建物4軒、ピット多数を検出した。これらの中で、最も古い遺構がS I 27で、出土遺物の時期から7世紀中頃～後半と考えられる。S X 26は7世紀後半、それに後出するS I 7は7世紀後半～8世紀初頭、S D 1は7世紀後半～末、S I 16は7世紀後半、S I 57は7世紀後半以降という時期で、本調査で確認した遺構は7世紀中頃～後半に及ぶものが大半を占める。S I 7は、北壁にカマドを持ち、袖部が一部残存するのみであったが、被熱も確認された。周辺の調査で確認されている竪穴建物に伴うカマドは、北壁あるいは西壁に設置されることが多い傾向にあり、S I 7も同様の特徴をもつ。今回の調査では、当地における古代の集落の広がりを確認することができた。なお、調査区の南半分は遺構の埋土であった可能性も考えられる。(大隈)



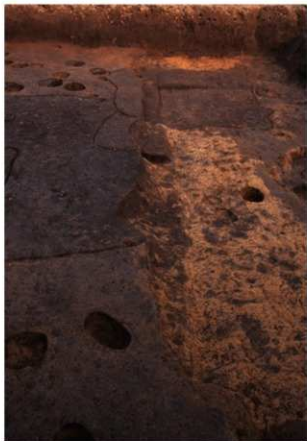
第11図 調査区全景（南から）



第12図 調査区上空から耳納北麓を望む（北東から）



第13図 調査区上空から筑後川を望む（南東から）



第14図 S D 1完掘状況（西から）



第15図 S I 7カマド断面状況(東から)



第16図 S I 7完掘状況(南から)



第17図 S I 16床面検出状況(南から)



第18図 S I 16完掘状況(南から)



第19図 S I 27床面検出状況(西から)



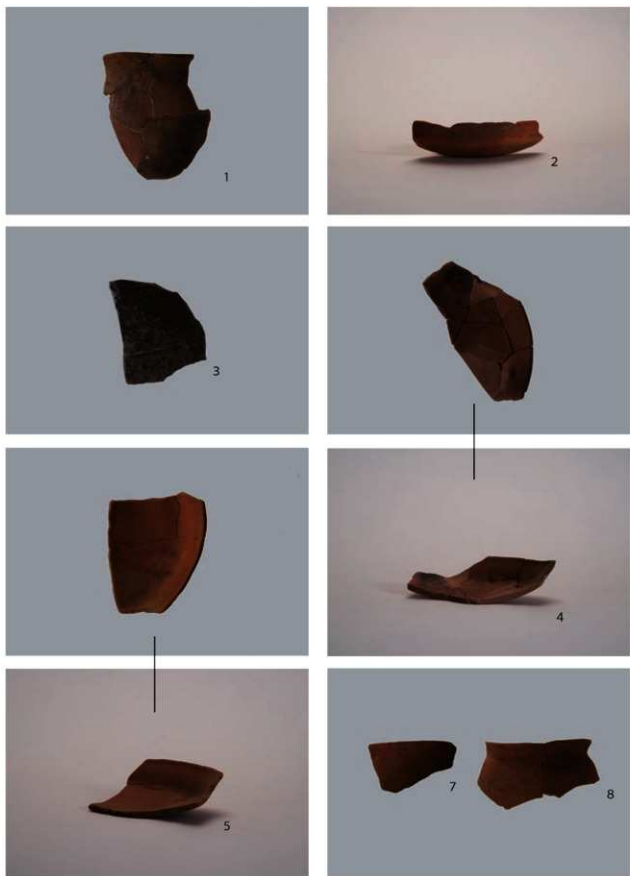
第20図 S I 27完掘状況(西から)



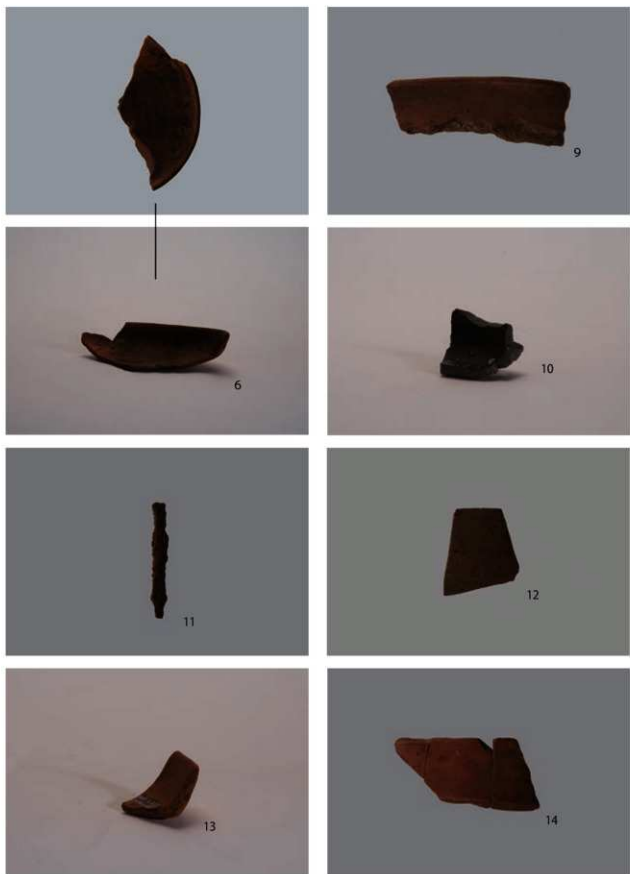
第21図 S I 57完掘状況(北から)



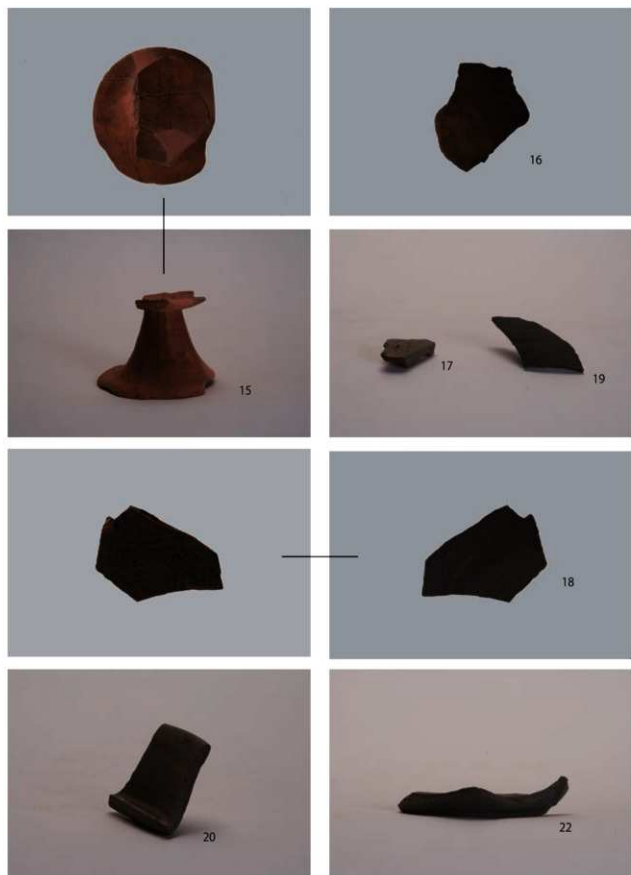
第22図 S X 26完掘状況(南西から)



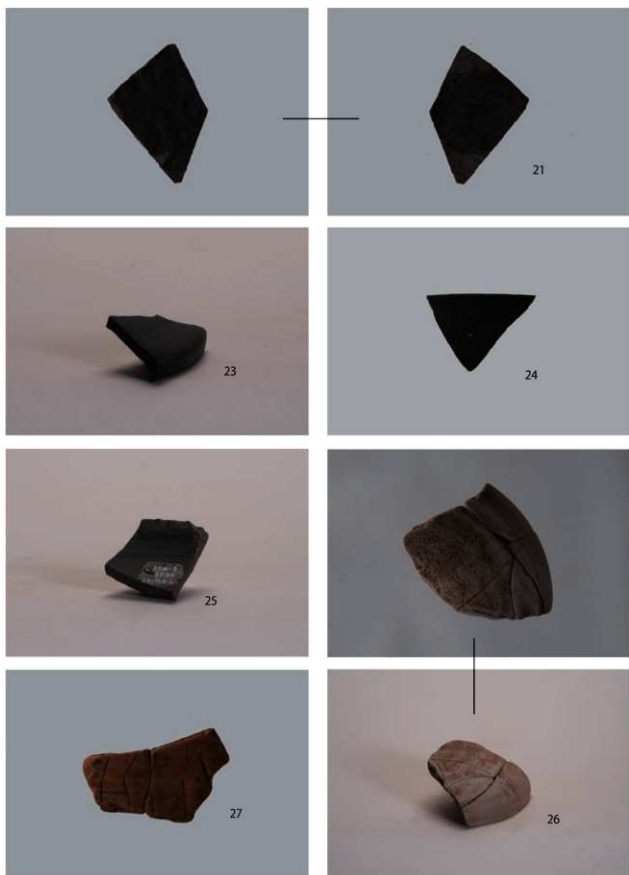
第23図 出土遺物写真1



第24図 出土遺物写真2



第25圖 出土遺物写真3



第 26 図 出土遺物写真 4

Ⅲ. 筑後国府跡第 301 次調査

1. 調査に至る経緯

本調査は令和 2 年 7 月 2 日付文書において、久留米市野中町 410 - 1 外における専用住宅建設に先立ち、埋蔵文化財包蔵の有無について照会されたことに端を発する。当地が周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡に該当するため、久留米市文化財保護課は、試掘確認調査の必要があることを土地所有者に伝え、令和 2 年 7 月 15 日に調査を行った。

調査では、現況の地表面より 60cm 下で遺構面を確認しピットが検出された。建設予定の住宅は基礎構造に鋼管杭を使用することから、住宅建設箇所の遺構の破損は免れず、発掘調査を実施する必要が生じた。

そのため、久留米市文化財保護課は、土地所有者と施工業者の協力を得て 7 月 28 日から 8 月 7 日の期間で発掘調査を行うこととなった。

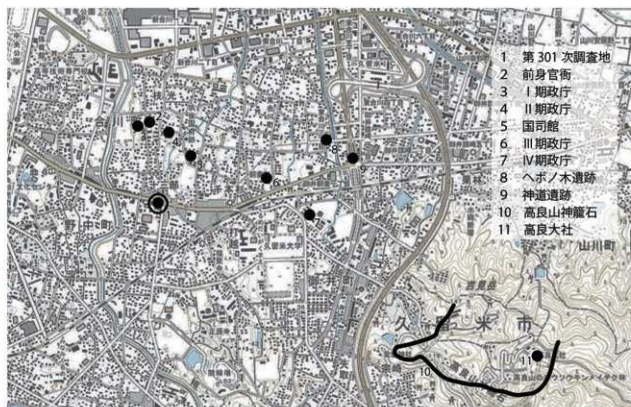
2. 位置と環境

筑後国府跡が所在する久留米市は、筑紫平野を東西に貫流する筑後川の左岸沿いに位置する。西流する筑後川は久留米城が所在する辺りで南西へ方向を変え有明海へ至る。

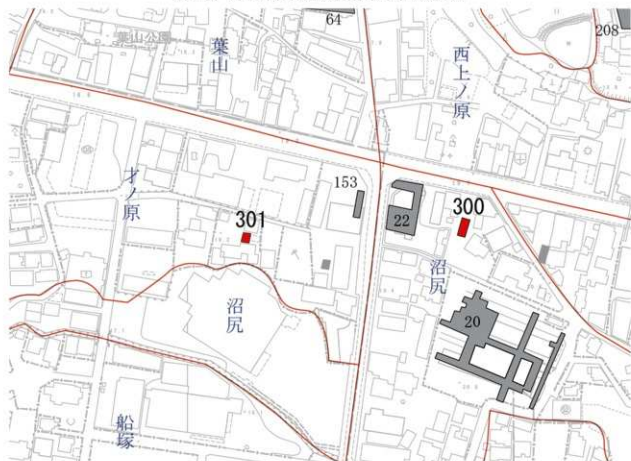
筑後国府跡は、市街地の東方約 1.6km 付近の東西 1.0km、南北 0.7km 程度の範囲に展開し、筑紫平野南端に連なる耳納山地西端に聳える高良山（312m）から北西に派生する低位段丘上に立地する。この低位段丘の先端部分を通称として「枝光台地」と呼び、高良川以西の合川町一帯を指す。

筑後国府跡から筑後川までの距離は現在 0.6km 程度であり、高良川と筑後川の合流地点にも近い。遺跡が立地する台地の南端には水縄断層帯が東西に伸びており、断層崖下には湧水が多数見られる。また、台地北端でも比高差 1m 程度になる段差が存在し、その下は筑後川氾濫原を形成している。西端の高良川、北端の氾濫原、南端の断層崖、東側の井田川に囲まれた範囲が国府域の四至を画す。

7 世紀後半、枝光台地西端の田代・古宮地区を中心に大溝や土塁、河川によって囲まれた台地に前身官衙と呼称する官衙的な遺構群が出現し、その後、筑後国が成立した 7 世紀末から 8 世紀中頃にかけて、古宮地区に南北約 180m の築地塀で区画された政庁的な官衙が営まれる（Ⅰ期政庁）。九州において律令体制が安定した時期を迎える 8 世紀中頃に古宮地区から約 200m 東の阿弥陀地区に築地塀で区画され、9 世紀前半には礎石建物が築造される南北 75m、東西 67.5m の政庁が営まれる（Ⅱ期政庁）。Ⅱ期政庁では、西脇殿や成長前の朝集殿的な建物群、築地塀、大量の古瓦等が検出されている。この時期、政庁付属官衙群は枝光台地一帯に広がり各官衙ブロック毎に計画方位をもって造営されており、Ⅱ期政庁と浅い谷を挟んだ南東約 200m の場所には、国司館跡も確



第 27 図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)



第 28 図 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,500)

認されている。Ⅱ期政庁は 10 世紀前半に火災により焼失したと推定され、政庁は再び移転する。Ⅲ期政庁は、Ⅱ期政庁から東へ約 600m の朝妻地区に築造されている。付属する官衙群はⅢ期政庁の東側に多数確認されており、国司館と推定される施設も存在する。さらに 11 世紀末には南東約 400m へ再び移転し(Ⅳ期政庁)、『高良記』に見える「今ノ荷」と思われるこの政庁は、12 世紀後半頃まで存続していたようである。『筑後国檢交替使実録帳』には、大治 5 年(1130)年から仁治 2 年(1241)までの国府院や駅館の荒廃した様子が描かれ、南北朝争乱期には懷良親王が筑後国府に陣を置いた記事がある。実質的な機能は別として、筑後国府の名称は 15 世紀まで存続したものと推測される。13 世紀以降の国衙関連遺構は発見されていないが、今後の調査で明らかになっていくものと思われる。

第 301 次調査地は、筑後国府跡と呼称する遺跡の範囲の南端にあり、大分市から久留米市を結ぶ国道 210 号の南側に位置する。筑後国府跡の南限は段丘状の高まりまでを境界としており、字名はオノ原である。範囲外である低地は字沼尻と呼ばれ、オノ原との比高差は 1 m 弱ある。周辺の調査事例を以下に列記する。

第 20 次調査 昭和 53 年 2 月 17 日から 3 月 17 日まで 調査対象面積 1,650㎡、トレンチ調査で行われる。検出した遺構は、溝状遺構 2 条、方形周溝状遺構 1 条、掘立柱建物 5 棟、土坑 9 基、ピット多数。出土遺物は土師器細片多数、黒色土器 B 類、土鍋、青磁細片が数点出土。

第 22 次調査 昭和 53 年 4 月 12 日から 5 月 12 日まで。調査面積 391㎡。検出した遺構は、道路状遺構 1 条、道路状遺構に伴うと考えられる溝状遺構 4 条、並走する柵列 2 条を想定している。その他、土坑 2 基、ピット多数。出土遺物は土師器、黒色土器 A 類が出土。

第 23 次調査 昭和 53 年 4 月 28 日に調査、調査面積 90㎡。検出遺構不明。ピット数基か。

第 53 次調査 昭和 57 年 10 月 5 日に調査、調査面積 16㎡。検出遺構不明。

第 153 次調査 道路状遺構が検出されている。

第 20・22 次調査で検出された遺構の時期は、弥生時代、8 世紀から 10 世紀代の掘立柱建物群、道路状遺構については古代の所産とされる。オノ原の北にある字葉山では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴建物と小規模な掘立柱建物からなる集落、8～10 世紀代の東西掘立柱建物群を中心とした官衙、12～13 世紀の屋敷地等の多彩な遺構群が検出されており、これら遺構群が展開することが想定される。

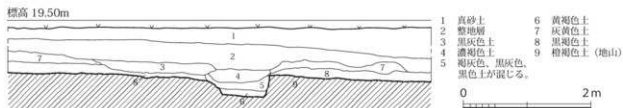
3. 調査の記録

(1) 調査の経過

- 7月28日(火) 曇一時雨 重機0.1㎡で表土剥ぎを行う。調査区の東側から掘り始める。
遺構面までの深さは60cm程、調査対象面積の内、25㎡を開ける。
- 7月29日(水) 晴 発掘作業員安全講習会のため休み。
- 7月30日(木) 晴一時雨 本日より遺構検出を開始。ピット10基程を検出する。調査区東端で攪乱を検出する。14時過ぎに熱中症のため作業員を救急搬送する。
- 7月31日(金) 晴 午前中のみ、作業を行う。
- 8月3日(月) 晴 ピットを掘り進める。
- 8月4日(火) 晴 清掃後、調査区東側の全景写真を撮影する。
- 8月5日(水) 晴 調査区の反転を行い、午後より遺構検出、掘削を行う。
- 8月6日(木) 晴 午前、全景写真撮影のため清掃を開始する。併せて遺構実測を行う。
午後より埋め戻し。
- 8月7日(金) 曇のち雨 午前中、埋め戻しを行い終了する。

(2) 基本層序(第29図)

位置と環境で前述したように比高差が1m弱あるため、南へ向かって下がる地形をしている。そのため、調査区の北側では地表面から70cmで床面に達するが、南側では90cmとなっている。地表から真砂土(1層)の堆積20~50cmの下に整地層(2層)が30cmから深いところで50cm以上堆積している。この層は、明治から戦前の陶磁器片、煉瓦片、瓦片を包含しており、築90年程の住居を取り壊した時のものである。3層についても同時期のものと考えられる。この建物の解体時期は平成中頃である。4~6層もその際に掘削されたものであろう。7層は耕作土、8層は旧表土であると考えられる。



第29図 調査区東壁土層断面図(1/60)

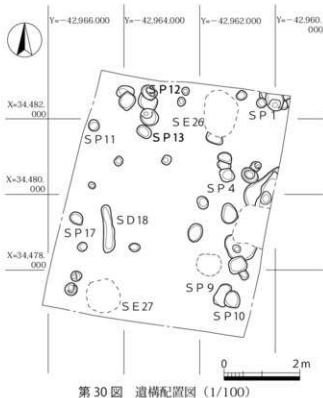
(3) 検出遺構(第30・32・33図)

検出された遺構はピット34基、井戸2基、溝1条で、ピットの配置はランダムであり掘立柱建物、柵列にはならない。井戸は瓦や煉瓦が混入しており近現代の所産である。

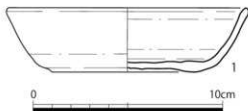
(4) 出土遺物(第31・34図)

遺物はバンコンテナ1箱に満たないものであり、弥生土器、土師器、黒色土器A類、須恵器、

近世陶磁器片が出土している。大半が細片であり器種を特定できるものは少ないが、弥生土器には、タタキが認められるものがある。1は、SP1から出土した土師器の坏で、底面はへら切り、板状圧痕が残る。復元口径は約12.8cm、底径8.8cm、器高3.4cmで、色調はにぶい橙色で外面の一部がにぶい黄橙色、胎土は精良で1mm以下の砂粒が混じる。また、赤色粒子がわずかに含まれる。



第30図 遺構配置図 (1/100)



第31図 出土遺物実測図 (1/2)



第32図 調査区東側全景 (北西から)



第33図 調査区西側全景 (北西から)



第34図 出土遺物写真

4. 総括

30基以上のピットを検出したが掘立柱建物、柵列は確認できなかった。遺物は9世紀代の土師器、須恵器片、黒色土器片が出土した他、包含層からは糸切底の皿片が出土している。調査地の南は沼尻と呼ばれる低地であり、調査地までの高まりを筑後国府跡の南限としている。今回確認されたピット群は、埋土、底面の状況、配列状況から大半が樹痕であり、明確に遺構とするものは無かった。しかし、第22次調査で確認された東西に延びる道路状遺構等もあることから、周辺に遺構が存在する可能性は高いと思われる。(江島)

IV. 筑後国府跡第303次調査（概要報告）

1. 調査に至る経緯

令和2年7月20日、土地所有者より久留米市朝妻町1474-1における「埋蔵文化財包蔵地の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡にあたり、東方には筑後国府跡Ⅲ期政庁が位置している。開発予定の基礎構造上、遺跡の保護が不可能であったことから、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年9月1日から9月16日まで現地での発掘調査を実施した。対象面積405㎡のうち、調査面積は170㎡である。



第35図 調査地点の位置図（1/25,000）

2. 位置と環境

本調査地点は、筑後国府跡Ⅲ期政庁から西に約80mの地点に位置している。位置と環境については、第三章を参照されたい。標高は約13mを測る。



第36図 北区調査区全景（南から）

3. 調査の概要

今回の調査では、時期不明の倒木痕や古代のピットを検出した。遺構の密度は低く、大半はピットである。遺物は、土師器や黒色土器、陶磁器が出土した。ピットからは、10世紀代に属する土師器の坏が出土している。遺構確認面直上の遺物包含層からは、10世紀後半～11世紀中頃の越州窯系青磁碗が出土している。また、今回の調査地は、国司館から味水御井神社に延びる道路推定線上に位置しているが、関連遺構は検出されなかった。（大隈）



第37図 南区調査区全景（北から）

V. 南薫本村遺跡第3次調査（概要報告）

1. 調査に至る経緯

本調査は、久留米市通外町172-3外において、専用住宅建設が実施されることに端を発する。当地は南薫本村遺跡の一角に当たる。そのため、久留米市文化財保護課は、試掘確認調査が必要である旨を土地所有者に伝え、令和2年8月24日に試掘確認調査を行った。その結果、遺構が確認されたため、遺跡の保護に向けて協議を行なったが、基礎工事による遺跡の破壊は免れず、土地所有者と施工業者の協力を得て8月31日から9月5日の期間で発掘調査を行った。



第38図 調査地点位置図（1/25,000）

2. 位置と環境

南薫本村遺跡は久留米市街地の北東部、筑後川の氾濫原に突き出した標高14m余りの通称櫛原台地と呼称される低位段丘上に位置する。櫛原台地には多くの弥生時代の遺跡が分布しており、甕棺墓が確認された市ノ上北屋敷遺跡、西屋敷遺跡や弥生時代の竪穴建物、掘立柱建物や古墳時代初期の溝に囲まれた区画が確認され、区画の中から掘立柱建物2棟が検出された市ノ上東屋敷遺跡が所在する。



第39図 調査区全景（南から）

3. 調査の概要

調査区より北側は段造成されており、本来の地形は、緩やかに北へ傾斜する高台であったと推測される。検出遺構は少なく、竪穴建物（S I 10）、畝状遺構、溝、土坑、ピットであった。遺物は全体でパンコンテナー1箱と少量で、大半がS I 10から出土した。南薫本村遺跡では、これまで第1・2次調査が行われ、弥生時代の集落や奈良時代の遺構が展開することが知られている。当調査においても弥生時代の竪穴建物、8世紀代の須恵器片が確認され、同様の結果が得られた。竪穴建物は弥生時代後期初期の高三階式段階に位置付けられる。（江島）



第40図 S I 10 全景（南東から）

VI. 市ノ上遺跡第3次調査（概要報告）

1. 調査に至る経緯

令和2年8月4日、土地所有者より久留米市合川町2009番4、2010番3における「埋蔵文化財包蔵地の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である市ノ上遺跡に位置し、平成25年度に発掘調査を行った第2次調査地点の南に隣接する。専用住宅建設地は保護層が確保されるものの、駐車場部分は地下げが行われ、遺跡の保護が困難であることから、駐車場部分を対象に発掘調査を行うことで協議を行い、発掘調査の運びとなった。現地における調査期間は、令和2年10月20日から21日である。



第41図 調査地点の位置図（1/25,000）

2. 位置と環境

市ノ上遺跡は、通称「市ノ上台地」と呼ばれる低丘陵上、標高12mに位置する。台地上には、弥生時代から古代にかけての遺跡が展開しており、北から、市ノ上北屋敷遺跡、市ノ上東屋敷遺跡、市ノ上遺跡と一連の遺跡群を構成する。市ノ上北屋敷遺跡からは、弥生前期の環状土坑群が、市ノ上東屋敷遺跡からは、古墳時代初頭の方形区画等の遺構が確認されている。



第42図 調査区全景（南東から）

3. 調査の概要

現地表下40cmで黄褐色地山を検出した。検出遺構は、ピット・土坑である。各遺構から出土した遺物はどれも細片が多く、出土量もパンコンテナ1箱に満たない。検出遺構の内、SK2・11・19は方形土坑であり、90cm程度と一定の深さを有する。落とし穴状の遺構とも考えられるが、底面に杭痕跡等は確認できずその性格は不明である。SK19の埋土中より弥生土器の甕口縁が出土しているが、その他は細片が多く時期決定は困難である。その他、ピット等からは弥生土器片、石鏃、土師器高台付杯、須恵器高台付杯等、弥生時代から8世紀代の遺物が確認されている。（熊代）

各種開発確認調査

VII. 高三瀨遺跡第11次調査

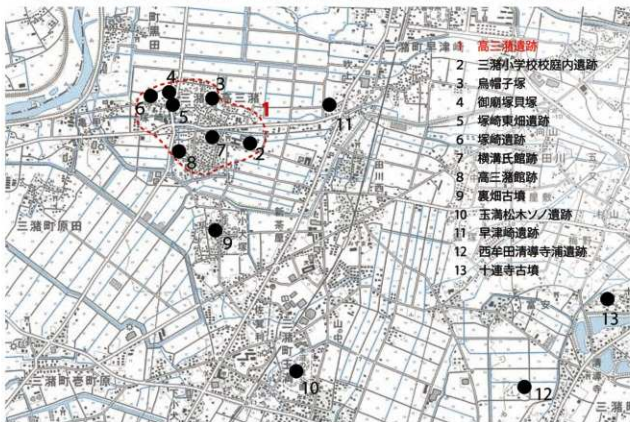
1. 調査に至る経緯

平成31年3月28日に公共下水道管渠布設工事における「埋蔵文化財包蔵の有無について（照会）」が提出された。工事の掘削幅は狭いが、弥生時代の墓域が確認された高三瀨遺跡第5次調査の北隣にあたることから、令和元年12月3日から12月17日に工事立会を実施した。12月5日に表土掘削中に甕棺墓が出土したため、工事を中断し、調査を実施し、同日埋め戻した。対象面積3859㎡のうち、調査面積は3.5㎡である。

2. 位置と環境

久留米市三瀨町は、久留米市の南西部に位置する。筑後川下流域の左岸に広がる沖積地に立地し、耳納山地より西に伸びる八女丘陵の最西端付近にあたる。三瀨町の北部では広川が、南部では山ノ井川が筑後川に合流し、豊かな土壌と発達したクレークを利用した福岡県内でも有数の穀倉地帯である。高三瀨遺跡は三瀨町の北部、三瀨町高三瀨に所在する遺跡で、低位段丘上に立地し、標高約6mを測る。

三瀨町では縄文時代の遺跡は少ないが、西牟田清導寺浦遺跡で落とし穴が17基検出されている。

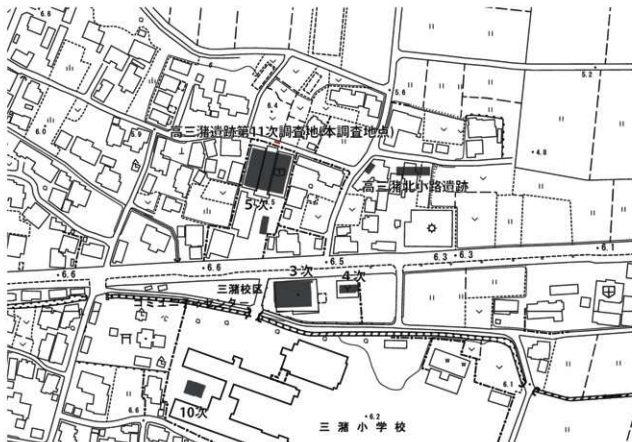


第43図 調査地点と周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

弥生時代の遺跡・遺物は広い範囲で確認されており、特に高三瀨遺跡は北部九州の後期初頭の標識土器「高三瀨式土器」の名称の由来として知られている。高三瀨遺跡は弥生時代の甕棺墓、石棺墓をはじめとする遺構や遺物が開発や表採の際に多数発見されているが、発掘調査はあまり行われてこなかった。しかし近年は土地開発が進み、調査事例が増え、高三瀨遺跡の性格が少しずつ明らかになってきている。

第11次調査地は高三瀨遺跡の東部にあたり、第5次調査地の北部、高三瀨北小路遺跡西部に位置する。東西に延びる段丘の尾根上に立地し、比較的標高が高く、南北に向かって標高は下がる。他に近隣では高三瀨遺跡第3・4・10次調査地があり、弥生時代中期から後期の遺構が検出されている。高三瀨北小路遺跡、高三瀨遺跡第5次調査地は弥生時代中期から後期の墓域にあたり、甕棺墓27基、土壇墓5基、石蓋土壇墓4基、石棺墓8基、計42基が検出された。後期の甕棺内部からは赤色顔料とともに連玉が出土している。

周囲にも弥生時代の遺跡が多く存在し、高三瀨遺跡の北端に位置する烏帽子塚周辺からは銅剣が2点出土し、高三瀨遺跡の西部に位置する塚崎東畑遺跡では、前期末から中期初頭の竪穴建物、中期前半から中期中頃の甕棺墓を検出している。自然堤防の最高位付近に位置する御廟塚貝塚は、矢野一貞の『筑後将士軍談』の中で墳墓の存在を示し、箱式石棺と考えられる棺外に銅剣が2点副葬されていたと紹介している。また、現在でもカキ殻などが散乱する貝塚でもある。このように高三瀨集落周辺には弥生時代の大規模な集落が広がっていたことがわかる。

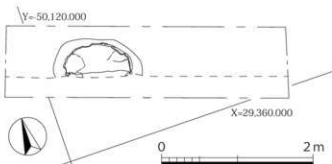


第44図 調査地点の位置と周辺地形図(1/2,500)

3. 調査の記録

(1) 調査の経過

12月3日から12月17日に実施した工事立会中の12月5日、表土掘削中に甕棺墓が出土した。そのため、工事を中断し、測量と写真撮影、遺物の取り上げを行った。同日、埋め戻しを実施した。遺構配置図は、トータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。K1実測図は測量データと遺物実測図から復元したものである。



第45図 遺構配置図 (1/50)

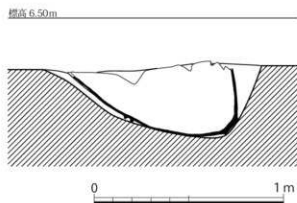
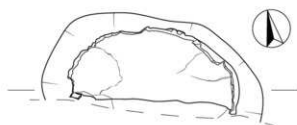
(2) 検出遺構

今回の調査では、甕棺墓1基を検出した。以下、遺構について記述する。

甕棺墓

K1 (第45・46・49・50図)

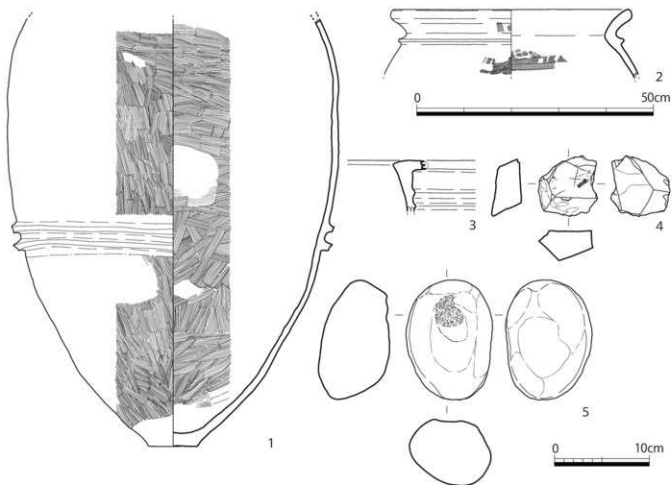
地表下50cmで検出した甕棺墓である。下甕の一部のみ原位置を保ち、南部は攪乱により削平されていた。長軸長0.95m、短軸長0.45m以上、深さ0.35mを測る。大きく削平されているため詳細は不明であるが、おおよその主軸方位はN-77°-W、埋置角度は45°程度であったと考えられる。甕棺、弥生土器、石製品が出土している。後期前半に属する。



第46図 K1実測図 (1/20)

(3) 出土遺物 (第47・51図、第4表)

甕棺の他、ビニール袋1袋分の遺物が出土した。弥生土器や石器を図示可能な資料のみ掲載した。全てK1内部の埋土から出土しているが、後世の削平時に他遺構の遺物が混入している可能性が高い。1・2は甕棺である。1は下甕で下半部のみ残存する。長胴形を呈し、最大径が上半に位置し、下半に断面台形の突帯を2条有する。内外面に刷毛目を施し、接合部は特に強い力で調整を施している。2は上甕・下甕の判断はつかない。口縁断面は「く」字状を呈し、口縁直下に断面三角形の突帯を有する。内外面に紙幅の都合上、個々の法量や色調などの詳細については出土遺物観察表を参照願いたい。



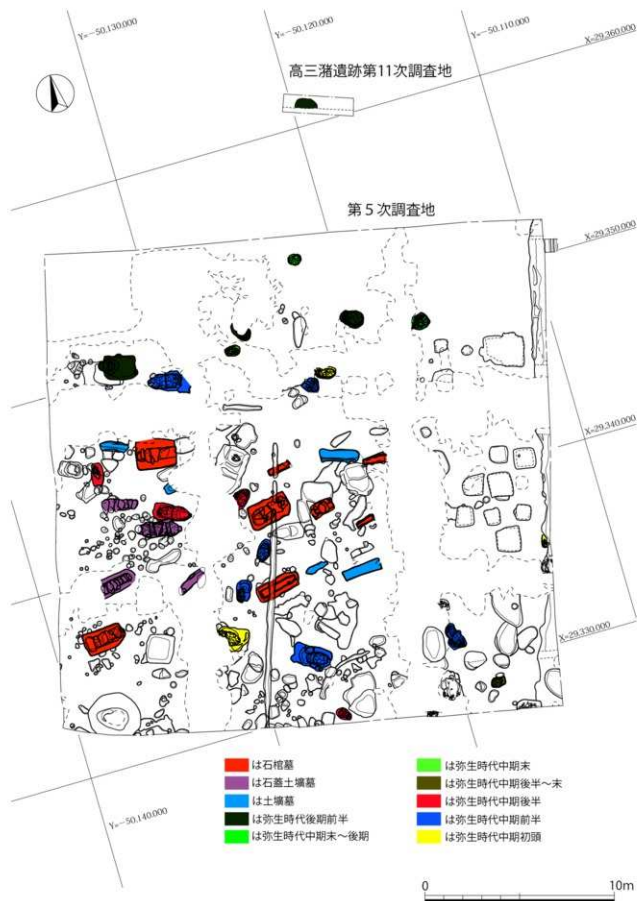
第47図 出土遺物実測図(1・2は1/8、3~5は1/4)

第3表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種別	部種	法量			色調		調整		胎土	備考	遺物登録番号
				口幅(長さ)	底幅(幅)	器高(厚さ)	外面	内面	外面	内面			
1 第47図	K1	赤土土器	甕	—	(10.4)	(90.6)	明赤褐色	橙	ナデ 刷毛目	ナデ 刷毛目	砂粒含む		201911000001
2 第47図	K1	赤土土器	甕	(5.1)	—	(14.5)	橙	橙	ナデ 刷毛目	ナデ 刷毛目		外面に化粧土	201911000002
3 第47図	K1	赤土土器	甕	—	—	(5.4)	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	細砂粒含む		201911000003
4 第47図	K1	石製品	砥石	(6.4)	(6.1)	3.8		白					201911000004
5 第47図	K1	石製品	凹石	12.7	9.1	7.5		暗灰				編入首	201911000005

4. 総括

今回の調査では、後世の開発によって大きく削平されていたものの、弥生時代後期前半の甕棺が出土した。第5次調査地でも後期前半の甕棺は3基検出されており、そのいずれも調査区北部に位置している。今回の調査で、後期前半の甕棺墓は墓域北部分の尾根付近に集中していることが明らかになった。(小川原)



第48図 高三瀨遺跡第5・11次調査主要遺構図(1/200)



第49図 K1検出状況(南から)



第50図 K1完掘状況(南から)



1



3



1 内面調整



4



2



5

第51図 出土遺物写真

VIII. 久留米城外郭遺跡第26次調査

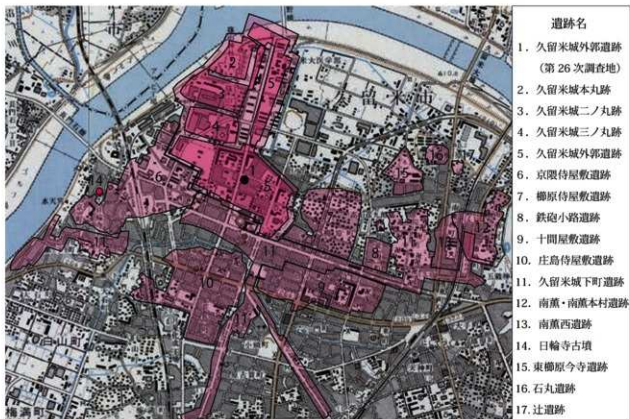
1. 調査に至る経緯

令和2年4月16日、土地所有者からモデルハウス建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である久留米城外郭遺跡に含まれ、対象地西部で実施した試掘確認調査においても地表下20cmで遺構が確認された。遺構面と基礎の間に保護層が確保できず、遺跡の保存が困難であったため発掘調査を行うことになった。現地調査期間は令和2年4月24日から5月30日までである。対象面積50㎡のうち、調査面積は22㎡である。

2. 位置と環境

福岡県久留米市は、筑後川の中・下流域にあたり、筑紫平野のほぼ中央に位置する。久留米城外郭遺跡は筑後川左岸に形成された低位段丘上に立地し、本調査地は遺跡のほぼ中央に位置する。標高は約10mを測る。

本遺跡では、旧石器時代のナイフ形石器や弥生時代の豊棺墓、古代の竪穴建物など中世以前の遺物・遺構も検出され、低位段丘における人々の活発な営みが窺える。



第52図 調査地点と周辺の遺跡分布図(1/25,000)

久留米城は市街地北西隅、西流する筑後川が南へ流れを変える付近の小高い丘の上に築かれた城で、築城時期は永正年間と伝承されているが、明確ではない。戦国時代には肥前の龍造寺氏と豊後の大友氏が衝突し、城主が度々入れ替わっていた。久留米城が本格的な城として整備されるのは豊臣秀吉の九州国割によって、毛利元就の九男で、実兄小早川隆景の養子となっていた小早川秀包が久留米城主となってからである。この頃には小規模な城下町もあったようで、両替町遺跡（久留米城下町遺跡第1次調査）では、ロザリオや教会堂の遺構などが確認されている。関ヶ原の合戦後、筑後国一国の領主となった田中吉政代には、久留米城は本城の柳川城（現柳川市）の支城の一つに位置づけられ、吉政の次男吉信（則政）が在城したと伝えられる。この頃も二ノ丸の拡張や、現在の筑後川梅林寺岸の開削など大規模な都市整備事業が行われた。その後、田中家の改易に伴い元和7年（1621）に有馬豊氏が北筑後21万石の領主として久留米に入国し、荒廃していた久留米城の再整備を行い、東向きの旧城を南向きに変更し、黒田氏や加藤氏の協力を得て、城の規模を拡大した。外郭もこれに伴い整備されたものである。また城の拡張に際して寺社や町人・商人を移転させることで城下町も拡大し、各町筋や寺町などが整えられ、寛永・正保年間（1624～1648年）頃には、久留米城下の整備は一旦落ち着く。

本調査区は、『延寶八年久留米市街図』では渡瀬氏の屋敷地、『天保年間久留米城下図』では検見方となっている。渡瀬氏は福島正則縁故の福島丹波の婿であった。福島左衛門太夫にルーツがある。有馬豊氏の久留米入封の際に召し抱えられた。詳細は第19次調査報告（久文報第328集）を参



第53図 調査地点の位置と周辺地形図（1/2,500）



第54図 『延寶八年久留米市街図』
(縮尺任意 赤丸が調査地)



第55図 『天保年間久留米城下図』
(縮尺任意 赤丸が調査地)

3. 調査の記録

(1) 調査の経過

調査地は久留米城外郭遺跡のほぼ中央に位置し、中世以降の遺構が検出されることが推測された。今回の調査は遺構の位置・範囲確認を主な目的として実施した。令和2年4月24日、調査地東側から表土剥ぎを開始した。調査地東部は後世の掘削によって遺構が削平されていたが、調査区西部で地表下80cmで遺構を確認した。また、調査区中央部は西部の遺構検出面から約10cm削平されている。表土掘削後、遺構の検出と掘削、測量、写真撮影を実施し、翌

30日に全景写真を撮影し、埋め戻した。同月30日に、器材を撤収し、現地での作業を終了した。遺構配置図は、トータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層図は水系メッシュ法(1/10)で記録した。

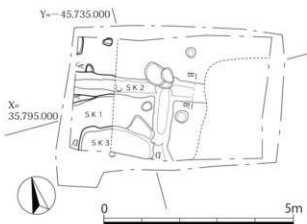
(2) 検出遺構

今回の調査では、溝1条、土坑2基、ピット9基を検出した。以下、主要な遺構について記述する。

溝

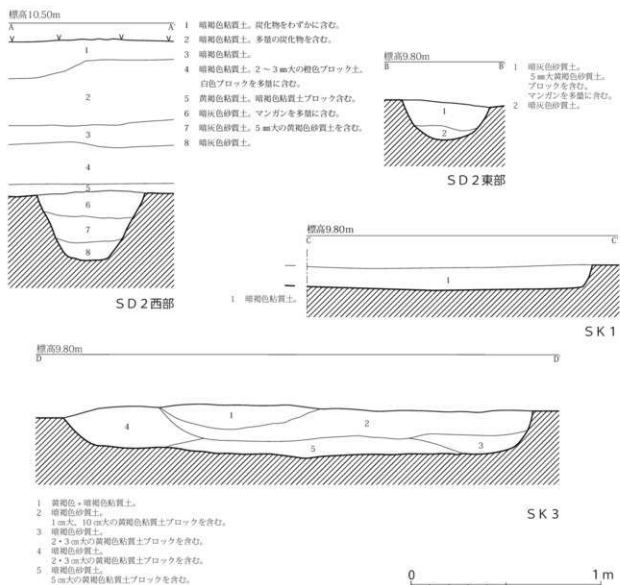
SD2 (第57・60・61図)

平面T字形に走行する溝で、調査区外に延びる。東西の長さ3.5m以上、南北の長さ2.1m以上、深さ約15～35cmを測る。掘方の断面形は半円形を呈する。中央部が1段下がり、10cm程低くなる。土師器や須恵器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、土製品、弥生土器が出土している。



第56図 遺構配置図(1/100)

Ⅷ. 久留米城外郭遺跡第 26 次調査



第 57 図 SD 2、SK 1・3 土層断面図 (1/20)

土坑

SK 1 (第 57・62 図)

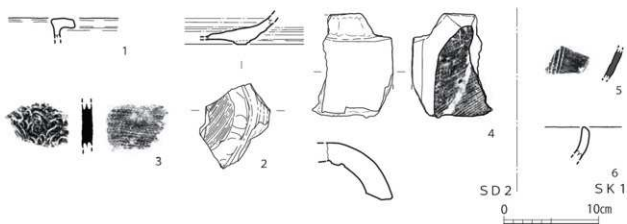
調査区の南西部で検出された土坑で東部は攪乱により削平される。大部分が調査区外へ広がるため平面形は不明であり、長軸長 1.5m 以上、深さ 10cm を測る。底面はほぼ平坦である。土師器や陶器、瓦質土器、土製品が出土している。

SK 3 (第 57・63 図)

調査区の南西部で検出された土坑で南部は調査区外へ広がる。平面形は隅丸方形または楕円形で、北東隅に方形の突出部を有する。突出部は 5cm 程度高く、複数遺構が重複している可能性もある。長軸長 2m 以上、短軸長 1.5m 以上、深さ 25cm を測る。底面はほぼ平坦である。土師器や瓦質土器が出土している。

(3) 出土遺物 (第58・64図、第4表)

今回の調査でビニール袋10袋分の遺物が出土した。弥生時代や中世の遺物が出土したが、いずれも破片であり、図示可能な資料のみ掲載した。紙幅の都合上、個々の法量や色調などの詳細については出土遺物観察表を参照願いたい。



第58図 出土遺物実測図(1/4)

第4表 出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	種類	器種	法量			色調		調整		胎土・備考	遺物登録番号
				口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	外面	内面	外面	内面		
1 第58図	SD 2	弥生土器	甕	—	—	(2.1)	浅黄橙	浅黄橙	ナデ	ナデ	細砂粒含む	202003000005
2 第58図	SD 2	土師器	土鍋	—	—	(3.0)	黒	浅黄橙	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ	微砂粒含む	202003000002
3 第58図	SD 2	須恵器	甕	—	—	(5.3)	浅黄橙	浅黄橙	布目タタキ	タタキ	砂粒含む	202003000004
4 第58図	SD 2	瓦	丸瓦	(10.7)	(8.5)	(6.0)	暗灰	暗灰、灰	ナデ	木炭き痕	精良	202003000003
5 第58図	SK 1	瓦質土器	蹄鉢	—	—	(3.2)	灰	灰	刷毛目	刷毛目	精良	202003000006
6 第58図	SK 1	土製品	埴塼	—	—	(3.6)	赤褐、 にぶい褐	褐灰	ナデ?	ナデ?	口縁内面側に 白色の付着物	202003000001
7 第58図	SD 2	陶器	埴	—	—	(1.5)	赤褐	赤褐		刷毛目	精良	202003000007

4. 総括

今回の調査では、後世の攪乱により大きく削平を受けていたが、溝1条と土坑2基を確認した。出土遺物に磁器は確認できず、細片ではあるが、16世紀代の所産と考えられる遺物がSD2、SK1で確認されていることから、今回検出された遺構は16世紀以前に属すると考えられる。同時期の遺物・遺構は、第23・24次調査など周辺の調査でも確認されている。特に埴塼が出土する遺構が複数みられており、周辺で金属加工が行われていたことが推測される。また、弥生時代の甕も出土しており、久留米城外郭遺跡から京隈侍屋敷遺跡にかけての低位段丘上に弥生時代中期の集落が広がることが再確認された。

(小川原)



第 59 図 調査区全景（北から）



第 60 図 S D 2 西部土層堆積状況（東から）



第 61 図 S D 2 東部土層堆積状況（西から）



第 62 図 S K 1 土層堆積状況（東から）



第 63 図 S K 3 土層堆積状況（北から）



6
第64圖 出土遺物写真

7

調査地は、7世紀後半代に造営されたとみられる大型四面庇建物を検出した第210次調査の南東側に近接する。また、周辺の調査では、弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構が確認されている。そのため、弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構の広がりとして7世紀後半代における遺構の広がりを確認することを目的に調査を行った。令和2年5月27日、表土剥ぎを行い、地表下30cmで遺構を確認した。その後、遺構の検出と掘削、測量、写真撮影を実施し、翌28日に全景写真を撮影し、埋め戻した。同月29日に、器材を撤収し、現地での作業を終了した。遺構配置図は、トータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くん cubic」で編集・保存した。ただし、土層図は水系メッシュ法(1/10)で記録した。

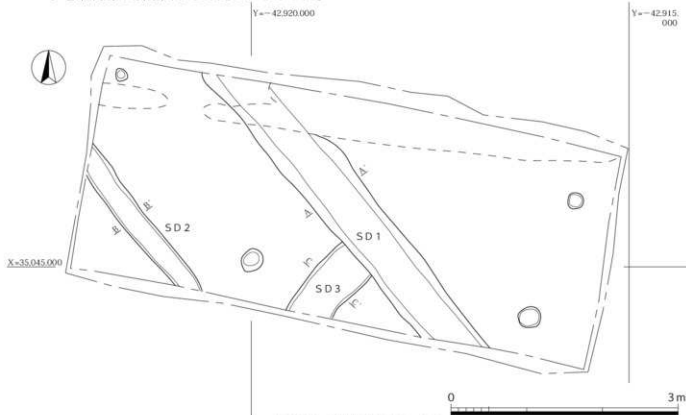
(2) 検出遺構

今回の調査では、溝3条、ピット4基を検出した。以下、主要な遺構について記述する。

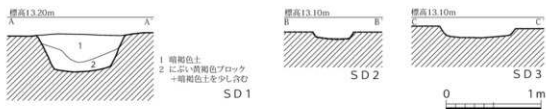
溝

SD1 (第66・67・69・70図)

調査区中央をN-39°-W方向に走る溝で、調査区外に延びる。長さ4.5m以上、深さ約30cmを測る。断面は逆台形を呈し、2層にはにぶい黄橙色ブロックが堆積している。1層と2層に出土遺物の時期差はなく、土師器の細片が出土している。後述するSD2と方向走位を同じくするため、SD1とSD2を側溝とする道路遺構である可能性もあるが、SD1とSD2の断面形状や深さが全く異なるため、その可能性は低いと考えている。なお、SD1とSD2との空間に道路遺構に伴う地業痕跡や硬化面などは見られなかった。



第66図 遺構配置図(1/50)



第 67 図 S D 1・2・3 遺構断面図 (1/40)

S D 2 (第 66・67・71 図)

調査区の南西部を N-38°-W 方向に走る溝で、調査区外に延びる。長さ 2.4 m 以上、深さ約 7 cm を測る。弥生土器もしくは土師器の細片が出土している。

S D 3 (第 66・67・72 図)

N-39°-E 方向に走る溝で、北東部は S D 1 に切られるが、南西部は調査区外に延びる。長さ 1.1 m 以上、深さ約 10 cm を測る。弥生土器もしくは土師器の細片が出土している。

(3) 出土遺物

今回の調査では、小袋 3 袋分の弥生土器や土師器の細片が出土したが、図化に耐えるものはない。

4. 総括

今回の調査では、溝 3 条とピット 4 基を確認した。

周辺の主要遺構配置図については、第 XI 章を参照いただきたい。周辺には弥生時代終末期から古墳時代初頭の遺構がみられるが、今回は当該期の遺構は見られなかった。

溝 3 条から出土した土師器の細片は、古代に属するとみられるが、時期決定には至っていない。時期や機能を含め、周辺の調査を待ちたい。(長谷川)



第 68 図 調査区全景（東から）



第 69 図 S D 1 土層断面（南東から）



第 70 図 S D 1 完掘状況（南東から）



第 71 図 S D 2 完掘状況（南東から）



第 72 図 S D 3 完掘状況（南東から）

X. 筑後国府跡第300次調査

1. 調査に至る経緯

令和2年6月14日、土地所有者から共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡に含まれ、計画では遺構の破壊が免れなかった。試掘確認調査においては極めて希薄な遺構が確認された。そのため、建物部分の一部を確認調査を行うことになった。調査面積は62㎡で、現地調査期間は令和2年7月20日から8月7日までである。

2. 位置と環境

詳しくは、第三章を参照されたい。調査区は道路遺構が確認された第22次調査地から東へ40mに位置する。

3. 調査の記録

(1) 調査の経過

試掘確認調査において確認された遺構の広がりを確認するため調査を行った。令和2年7月20日、表土剥ぎを行い、地表下50cmで遺構面を確認した。その後、遺構の検出と掘削、測量、写真撮影を順次実施し、翌月6日に全景写真を撮影し、同日中に埋め戻しを行った。翌7日に、全ての器材を撤収し、現地での作業を終了した。遺構配置図は、トータルステーションを用いて測量し、測量データは「遺構くんcubic」で編集・保存した。ただし、土層図は水系メッシュ法（1/10）で記録した。

(2) 検出遺構

今回の調査では、溝4条、道路遺構1条、ビット数基を検出した。南側は広範囲に攪乱によって遺構は破壊されていた。以下、主要な遺構について記述する。

溝

SD2（第73・84図）

調査区の中央部分をN-86°-W方向に走る溝で調査区外に延びる。SD5と平行する。長さ5.4m以上、深さ約12cmを測る。幅は0.8m～0.9mで断面は緩やかなU字形を呈する。土師器の坏や黒色土器A類、須恵器の甕などが見られ、9世紀後半代以降に埋没したとみられる。

SD4（第73・72・83図）

調査区の中央部分をN-81°-W方向に走る溝で、調査区外に延びる。長さ5.4m以上、深さ

45cmを測る。土器の細片が出土している。SF 1 の側溝であるSD 5を切っており、道路遺構を掘りこんだとみられる。第4層(第74図)から黒色土器A類や須恵器の甕の細片、平瓦が、第5・6層(第74図)から土師器の坏や須恵器の甕の底部が出土している。

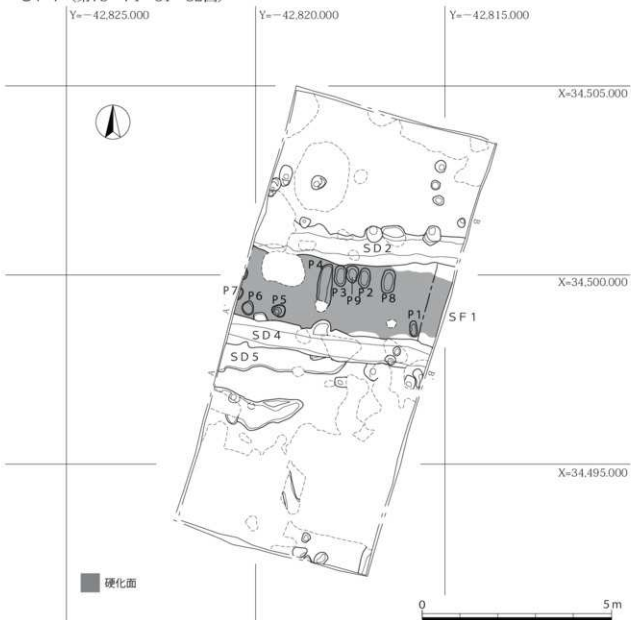
溝

SD 5 (第73・74・83図)

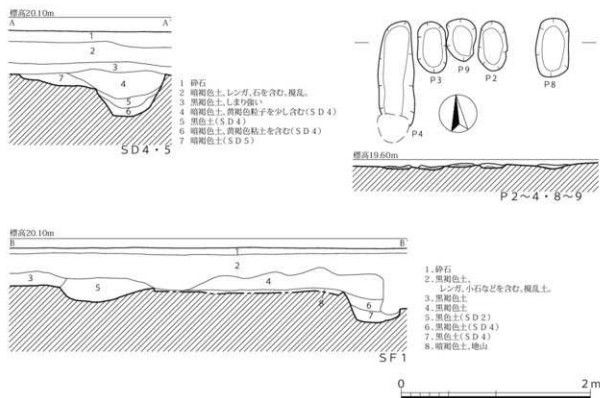
調査区の中央部分をN-86°-W方向に走る溝で、SD 4に切られており、西部は調査区外に延びる。SD 2と平行する。長さ3.2m以上、深さ約12cmを測り、幅は0.7~0.8m、断面は逆台形を呈する。黒色土器A類や土師器の細片が出土している。

道路遺構

SF 1 (第73・74・81・82図)



第73図 遺構配置図(1/100)



第74図 S D 4・5、S F 1土層断面図、P 2~4・8~9実測図(1/40)

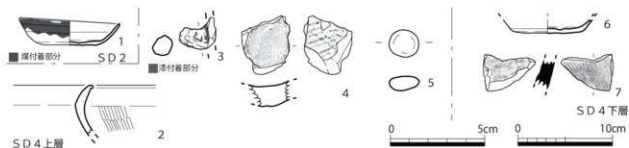
調査区の中央部分で検出した道路遺構である。調査区から西に40mの場所で行った第22次調査で東西方向に走行する道路遺構(S F 956)が検出されていたことや、硬化面が認められたことから道路遺構と判断した。S D 2・4・5が平行しており、側溝とみられ、ほぼ東西方向に走行する。硬化面の幅は約1.8mで、長さは4.3m以上である。硬化面はS D 2とS D 4の間で全面的にみられ、地山の上面を硬化させている。また、波板状圧痕が検出されており、いずれも深さ2cm程度で非常に浅い。この波板状圧痕に石英や片岩といった小礫や土師器、黒色土器A類、須恵器、瓦などが充填されていた。波板状圧痕間の硬化面は盛り上がりおらず、水平な硬化面に掘りこまれていることから、地業によるものではなく、補修痕である可能性がある。

(3) 出土遺物(第75・86図、第5表)

今回の調査では、パンコンテナー0.5箱分の遺物が出土した。

1はS D 2から出土した土師器の環で外面に煤が付着している。底部はヘラ切りしている。2~5はS D 4・4層から出土した。2は土師器の甕で外面はタタキがみられる。3は土師器の把手で外面に漆と思われる付着物がみられる。4は平瓦で、凹面は斜格子文がみられる。5は丸石で表面は平滑である。碁石の可能性もある。6・7はS D 4下層から出土した。6は土師器の環で、底部はヘラ切りしている。7は須恵器の甕で、下半部に回転ヨコナデがみられる点や、内面の道具痕が残っている点から頸部がすぼまる甕もしくは壺の底部付近と考えられる。

S F 1の波板状圧痕(P 1~P 9)の充填された遺物の様相からP 1~P 9の遺物の充填の仕



第75図 出土遺物実測図 (5: 1/2、それ以外は1/4)

第5表 出土遺物観察表

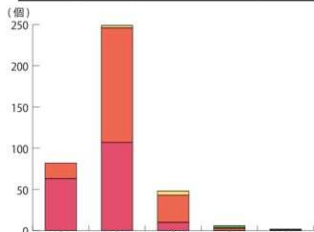
遺物No.	出土遺構	種別	器種	法量(cm)			色調			調整・文様			胎土 石材、重量	備考	登録 番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面 (輪)	内面 (胎土)	外面 (凸面)	内面 (凹面)	調整	文様			
1 第75~86層	SD2	土師器	杯	11.6	6.9	2.9	橙	に染み	同転ナデ 底部へタ切り	同転ナデ ナデ	精良	外面に煤付着	202008 000008		
2 第75~86層	SD4 上層	土師器	甕	(19.6)	—	3.7	浅黄橙	浅黄橙	ヨコナデ タタキ	ナデ	1~3mm程度の 砂粒を含む		202008 000009		
3 第75~86層	SD4 上層	土師器	把手	—	2.3	—	黄橙	黄橙	ナデ	ナデ	1~2mm程度の 砂粒を含む	外面に煤付着か	202008 000013		
4 第75~86層	SD4 上層	土師器	肥子	6.1	5.4	2.4	浅黄橙	橙	網格子	布目	精良		202008 000011		
5 第75~86層	SD4 上層	石製品	丸石	1.7	1.6	0.8	灰白	—			3.2g		202008 000010		
6 第75~86層	SD4 下層	土師器	杯	—	(5.4)	(1.6)	橙	橙	同転ナデ 底部へタ切り	同転ナデ ナデ	精良		202008 000012		
7 第75~86層	SD4 下層	須恵器	甕	—	—	3.2	に染み 赤褐色	に染み	タタキ 同転ナデ	不明	2mm程度の砂粒 を含む	内面に赤色顔料付着	202008 000014		

方の違いと時期差を明らかにするため、波板状圧痕出土の遺物をまとめた(第6表、第76~78図)。このうち、P2にはP8・9の遺物も含まれている。遺物を分けるにあたって、碟の形が不整形であることや数が膨大であることから、5mm、1cm、2cm、3cm、5cm四方の網目を用意し、篩にかけた。また、土師器の中には黒色土器A類も含まれている。遺構別に見ると、P6では土師器が含まれている割合が100%になるが、他の遺構では、土師器が30%~60%、碟が30%~70%含まれており、土師器と碟で大半を占めていることが分かる。また、どの遺構においても、含まれる遺物の大きさは1cm以上2cm未満の出土遺物が約50%~70%を占めており、遺構の大きさと遺物の大きさに相関関係がないことが分かった。遺物の大きさと種類をみると、5mm以上1cm未満の出土遺物は、碟19個に対し土師器が63個と土師器の方が多い。続く1cm以上2cm未満の出土遺物は最も多い。その内訳は、碟が139個、土師器が107個、須恵器が3個と碟が最も多い。2cm以上3cm未満の出土遺物は碟33個、土師器10個、須恵器5個と碟が多くなる傾向が見られた。3cm以上の出土遺物になると、碟が瓦に限られ、土師器や須恵器はみられなかった。つまり、土師器の方が碟や瓦に対してやや小型のものを充填している傾向があることが分かる。なお、出土した碟の石材は石英もしくは片岩である。

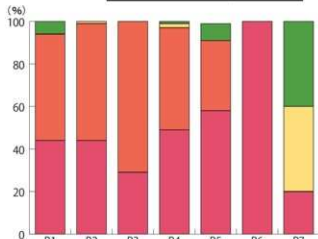
波板状圧痕の遺物の充填は、①土師器と碟が大半を占めること②遺構と遺物の大きさに相関関係がないこと③土師器が他の遺物に対して小型である傾向があることが分かったが、遺構によって傾向が大きく異なることはなく、充填の仕方の違いや時期差は看取できなかった。

第 6 表 S F 1 波板状圧痕出土遺物一覧表

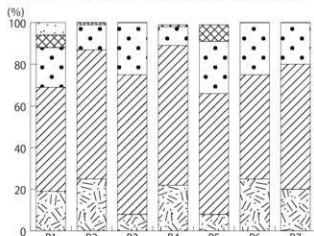
遺構名	種別	大きさ	個数(個)	遺構名	種別	大きさ	個数(個)	
P1	土師器	5mm以上1cm未満	3	P4	須恵器	1cm以上2cm未満	2	
		1cm以上2cm未満	3			瓦	2cm以上3cm未満	3
		2cm以上3cm未満	1		磔		3cm以上5cm未満	2
	5cm以上	1	5mm以上1cm未満				8	
	1cm以上2cm未満	5	1cm以上2cm未満			75		
2cm以上3cm未満	2	2cm以上3cm未満	14					
3cm以上5cm未満	1	3cm以上5cm未満	1					
P2	土師器	5mm以上1cm未満	21	P5	土師器	5mm以上1cm未満	1	
		1cm以上2cm未満	28			1cm以上2cm未満	5	
		2cm以上3cm未満	3			2cm以上3cm未満	1	
	須恵器	2cm以上3cm未満	1		瓦	3cm以上5cm未満	1	
		5mm以上1cm未満	8			磔	1cm以上2cm未満	2
		1cm以上2cm未満	45				2cm以上3cm未満	2
2cm以上3cm未満	11	5mm以上1cm未満	1					
3cm以上5cm未満	1	P6	土師器	1cm以上2cm未満	2			
P3	土師器			1cm以上2cm未満	5	2cm以上3cm未満	1	
				2cm以上3cm未満	2	P7	土師器	1cm以上2cm未満
		5mm以上1cm未満	2	須恵器	1cm以上2cm未満			1
P4	土師器	1cm以上2cm未満	11		2cm以上3cm未満			1
		2cm以上3cm未満	4		磔	5mm以上1cm未満	1	
		5mm以上1cm未満	37	1cm以上2cm未満		1		
		1cm以上2cm未満	63	合計	387			
2cm以上3cm未満	2							



第 76 図 S F 1 波板状圧痕出土遺物の大きさと種類

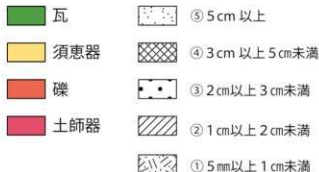


第 77 図 S F 1 波板状圧痕別の遺物の割合



第 78 図 S F 1 波板状圧痕別の遺物の大きさの割合

凡例



※P2 に P8・9 の遺物が含まれる

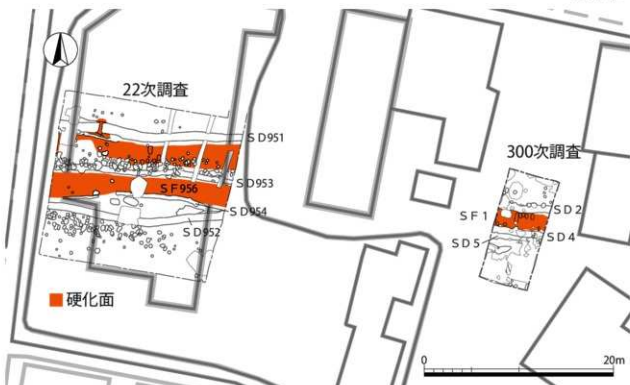
4. 総括

今回の調査では南半分が大きく攪乱を受けており、検出された遺構は道路遺構1条と溝4条、ピット数基であった。

SD2とSD5は走行方位(N-86°-W)が同じである一方、SD5を切るSD4は若干走行方位(N-81°-W)が異なる。そのため、SD2とSD5を側溝として機能させた後、SD5が埋没し、SD4が側溝として掘削された可能性もある。SD2・4から黒色土器A類が出土しており、少なくとも9世紀後半以降に埋没したとみられる。SF1の波板状圧痕からも黒色土器A類の細片が出土していることから、9世紀後半に道路としての機能は停止したとみられる。なお、黒色土器B類は今回の調査では出土していない。

今回の調査で検出されたSF1は、第22次調査で検出されたSF956のSD953・954間の延長部分にあたる。第22次調査では、道路遺構はSD951とSD952間を路面とするもので、SD953は道路が廃絶された後に掘削したものとされている。しかし、今回の調査では、第22次調査で確認されたSD953以北の硬化面は確認されなかったことや、SD2とSD4間で全体的に硬化面が見られ、この硬化面が道路として使用されたことが想定されることから、SD953とSD2は側溝として機能していたものと考えられる。そのため、第22次調査で検出されたSF956は、SD951とSD952を側溝とする道路から、その後SD953を北側の溝とする道路へと規模を縮小させたという仮説が立てられる。また、第300次調査では検出されなかったSD951以北の硬化面は、第300次調査地では削平された状態なのか、もしくは道路の進路を変えているのかなど課題が残る。

(長谷川)



第79図 第22次調査・第300次調査主要遺構配置図(1/400)



第 80 図 調査区全景 (西上空から)



第 81 図 SF1 検出状況 (西から)



第 82 図 SF1 土層断面 (西から)



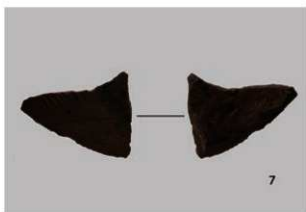
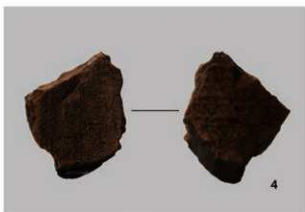
第 83 図 SD4・5 土層断面 (東から)



第 84 図 SD2 土層断面 (西から)



第 85 図 S F 1 波板状圧痕完損状況（北西から）



第 86 図 出土遺物写真

XI. 筑後国府跡第 302 次調査

1. 調査に至る経緯

本調査は専用住宅建設に伴う事前の発掘調査である。令和2年7月20日、土地所有者より代理人を通じて久留米市合川町字田代 1194 - 5、1195 - 12、1195 - 13 における「埋蔵文化財包蔵の有無」の照会が提出された。対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である筑後国府跡の範囲内に含まれている。本調査地の北側は前身官衙の指定地に隣接しているほか、東隣接地では第 297 次調査、南側では第 299 次調査が実施されている。開発予定の基礎構造上、遺跡の保存が不可能であったことから、土地所有者に対して発掘調査が必要な旨を回答した。令和2年4月2日に土地所有者より発掘調査の依頼が提出されたため、同年8月3日から8月7日まで現地での発掘調査を実施した。専用住宅建設予定部分は大きく攪乱を受けていたため遺構はなく、遺構の保存が可能な駐車場建設部分については、上面確認のみを行った。対象面積 175㎡のうち、調査面積は 20㎡である。

2. 位置と環境

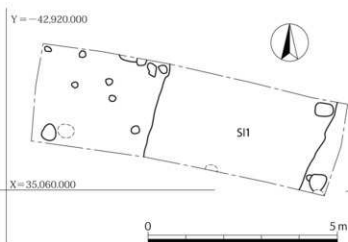
第 302 次調査地点は、第 299 次調査地点の南 20 m に位置する。位置と環境については、第三章を参照されたい。

3. 調査の記録

(1) 調査の経過

今回の発掘調査は、筑後国府跡の遺構の広がりを確認するために行った。令和2年8月3日に重機による表土剥ぎを実施した。同日の午後に現場作業員を投入し、遺構の検出と遺構の掘り下げを行った。同月4日に調査区の全体写真を撮影し、同月5日に遺構の測量を行った。6日に重機による調査区の埋め戻し、7日に発掘器材の撤収を行い、現地での発掘調査を終了した。

遺構の測量は、トータルステーションを、データの編集と保存は株式会社 CUBIC 製ソフト「遺構くん cubic」を使用した。



第 87 図 遺構配置図 (1/100)

(2) 基本層序 (第88図)

調査区西壁の層序は、褐灰色粘質土層が20cm (第1層)、その下にぶい黄褐色土層が20cm (第2層)、黄褐色粘質土層 (第3層) が5cm 堆積している。地表より45cmで遺構面に達した。

(3) 遺構の概要

今回の調査では、竪穴建物1軒、ピット14基を検出した。今回は上面確認を主体とした調査であり、遺構の掘り下げは最小限に留めている。以下、遺構の詳細について述べる。

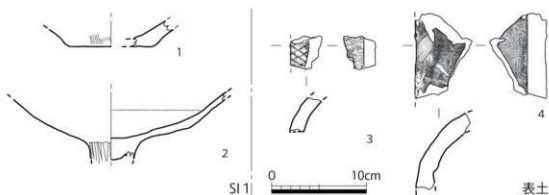
竪穴建物

S11 (第87・91図)

調査区西部で検出された竪穴建物である。長軸長は2.5m以上、短軸長は約4.5mを測る。遺構の北部と南部は調査区外に延びているため、平面プランは不明である。埋土は黒褐色粘質土を呈し、全体的に焼土を含む。主軸方位はN-14.56°-Eである。上面では、弥生土器の甕や高坏が出土しており、弥生時代終末～古墳時代初頭に属する。

(4) 遺物の概要 (第89・92図・第7表)

今回の調査は上面確認のみであったため、出土遺物は少なく、ビニール袋4袋分の遺物が出土した。遺物は、弥生土器の甕や高坏、古代の瓦が挙げられる。法量や色調など詳細な内容については、第7表の遺物観察表を参照されたい。



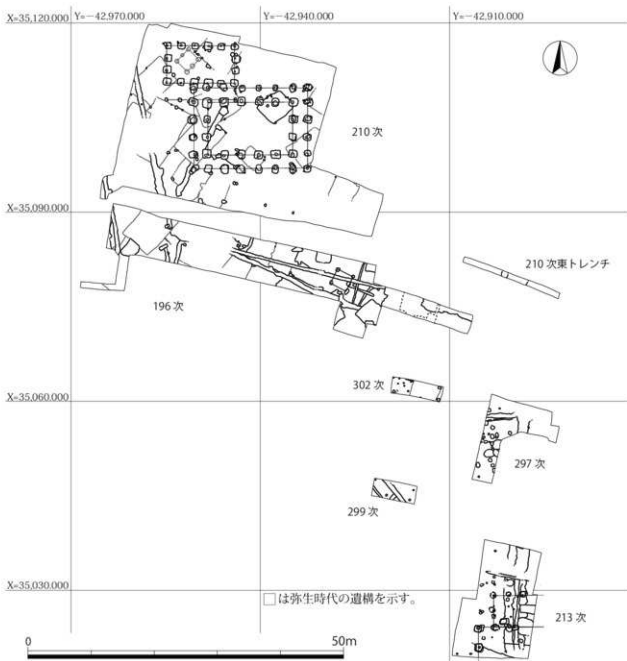
第7表 出土遺物観察表

遺物番号	附番号	出土遺物	材質	器種	法量			色調			埋土	備考	登録番号	
					口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚み)	外面	内面	外面				内面
1	第89図	S11	弥生土器	甕	—	(9.0)	(2.7)	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケ目ナデ	ナデ	3mm大の粒子・雲母を含む。	20201000003	
2	第89図	S11	弥生土器	高坏	—	—	(7.1)	浅黄褐色	明褐色	ナデ	ナデ	雲母・赤色粒子・1~2mm大の白色粒子を含む。	20201000004	
3	第89図	表土	瓦	丸瓦	(3.5)	(3.2)	1.5	灰白	灰白	格子目タタキスリ消し	布目	精良。	破断後、未調整。分別尖部痕跡あり。	20201000002
5	第89図	表土	瓦	丸瓦	(8.3)	(5.7)	1.6~1.9	灰	灰白	ナデスリ消し	布目	精良。1mm大の白色粒子を含む。	分別尖部の痕跡あり。	20201000001

4. 総 括

第 90 図は、田代地区における過去の調査で確認された遺構と第 299・302 次調査で確認された主要遺構を合成したものである。本調査地は、筑後国府跡の田代地区に位置しており、隣接地では前身官衙の中心的な施設である四面廂建物が検出されている。そのため、今回の調査では前身官衙や I 期政庁に関連する遺構の存在が想定された。しかし、それらを検出するには至らず、古宮地区から葉山地区に広がる弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴建物群の一部を検出するに留まった。古代に関する遺物としては、表土から斜格子タタキを伴う丸瓦が出土しており、9 世紀前半以降の時期を示している。

(大隈)





第 91 図 調査区全景（東から）



第 92 図 出土遺物写真

報告書抄録

ふりがな	れいわにねんど くるめしないいせきぐん
書名	令和2年度 久留米市内遺跡群
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第427集
編著者名	大隈彩未(編)・江島伸彦・熊代昌之・小川原勲・長谷川桃子
編集機関	久留米市 市民文化部 文化財保護課
所在地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 TEL:0942-30-9225 FAX:0942-30-9714 Email:bunkazai@city.kurume.fukuoka.jp
発行年月日	2021(令和3)年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
秋成遺跡 第3次調査	福岡県久留米市 田主丸町秋成 字鬼杉1291-3	690026	640351	33° 20' 57"	130° 42' 38"	20200203 ～ 20200306	67㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
秋成遺跡 第3次調査	集落	古代	竪穴建物 溝 ビット	4軒 1基 多数	土師器、須恵器、金属製品		7世紀中頃～8世紀初頭の竪穴建物4棟を検出した。	

要約

今回の調査では、古代の溝1条、竪穴建物5棟、ビット多数を検出した。遺構の時期は7世紀中頃から8世紀初頭までにおよぶが、7世紀後半のものも大半を占める。過去に周辺で行われた第2次調査や浮羽バイパスに伴う発掘調査においても同時期の遺構が検出されている。今回は、古代の集落の広がりを確認することができた。

土木工事の届出日	令和2年1月7日	遺物の発見通知日	令和2年3月10日 (1文財第1535号)
----------	----------	----------	--------------------------

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
筑後国府跡 第301次調査	福岡県久留米市 野中町410-1の一部、 410-16	40203	31102	33° 18' 36"	130° 32' 19"	20200728 ～ 20200807	40㎡	記録保存 調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第301次調査	官衙	古代 近代	ビット 井戸	32基 2基	弥生土器、土師器、須恵器、 黒色土器、陶磁器		古代のビット 群を検出。	

要約

調査では、ビットを32基確認しているが、掘立柱建物を確認することはできなかった。また、遺物はビットから土師器の坏底部片、細片が出土している。遺構検出面の直上層に5～10cmの包含層が堆積しており、糸切底の皿片が出土している。

土木工事の届出日	令和2年7月19日	遺物の発見通知日	令和2年8月14日 (2文財第982号)
----------	-----------	----------	-------------------------

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
筑後国府跡 第303次調査	福岡県久留米市 朝妻町 1474-1	40203	030112	33° 18' 42"	130° 32' 42"	20200901 ～ 20200916	170㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
筑後国府跡 第303次調査	官衙	不明 古代	倒木痕 ビット		1基 多数 土師器、黒色土器、 陶磁器		時期不明の倒木痕 と古代のビットを検 出した。	
要 約								
<p>本調査地点は、筑後国府跡Ⅲ期政庁の西側に位置する。遺構密度は低く、大半はビットである。ビットからは、10世紀代の土師器の坏が出土している。遺構確認面上の遺物包含層からは、越州窯系青磁碗（10世紀後半～11世紀中頃）が出土した。また、本調査地点は、国司館から味水御井神社に延びる道路推定線上に位置するが、関連遺構を検出することは出来なかった。</p>								
土木工事の届出日		令和2年1月22日		遺物の発見通知日			令和2年9月17日 (2文財第1255号)	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南薫本村遺跡 第3次調査	福岡県久留米市 通外町 172-3、 172-7、173-3	40203	30112	33° 19' 3"	130° 31' 33"	20200831 ～ 20200905	74㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
南薫本村遺跡 第3次調査	集落	弥生 古墳～古代 近代	竪穴建物 土坑 畝状遺構		1軒 2基 多数 弥生土器、土師器、 須恵器		弥生時代後期の 竪穴建物を検出。	
要 約								
<p>調査地は、久留米市街地の北東部、筑後川の氾濫原に突き出した標高14m余りの低位段丘上に立地する。竪穴建物1棟、土坑2基、ビットを検出。近代の所産と思われる畝状の耕作痕が調査区の南側に多く見られる。</p> <p>出土遺物は、弥生土器、土師器片、須恵器が出土している。過去の調査では、弥生時代後期の竪穴住居跡、土坑が検出され、押形文土器片が出土している。今回の調査では、弥生時代後期に比定される竪穴建物が出された。</p> <p>また、包含層からではあるが、須恵器片、土師器片が出土しており隣接する第1次調査の組成と同様のものである。</p>								
土木工事の届出日		令和2年8月24日		遺物の発見通知日			令和2年9月10日 (2文財第1185号)	

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
市ノ上遺跡 第3次調査	福岡県久留米市 合川町 2009 番 4、 2010 番 3	40203	30109	33° 19′ 0″	130° 31′ 54″	20201020 ～ 20201021	21㎡	記録保存調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市ノ上遺跡 第3次調査	集落	弥生・ 古代	土坑 不明遺構 ピット		3基 1基 弥生土器、土師器、須恵器、 石器		弥生時代から古 代の遺構を検出	
要 約								
調査地点は筑後川左岸に形成された標高 12 m の低台地上に位置する。周囲には、弥生時代から古代の遺跡が多く認められる。今回の調査では、弥生時代から古代にかけての土坑やピットを検出した。								
土木工事の届出日		令和 2 年 10 月 19 日		遺物の発見通知日		令和 2 年 10 月 27 日 (2 文財第 1517 号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
高三瀬遺跡 第 11 次調査	福岡県久留米市 三瀬町高三瀬 4091	690026	69026	33° 15′ 48″	130° 27′ 43″	20191203 ～ 20191217	3.5㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高三瀬遺跡 第 11 次調査	集落	弥生	喪棺墓		1基 弥生土器、石製品		喪棺墓 1 基を検 出した。	
要 約								
本調査地は、高三瀬遺跡の中でも東部の尾根上に位置している。今回の調査は、下水道管渠の工事立会の際に喪棺墓が発見されたため実施した。弥生時代後期前半の喪棺が検出され、高三瀬遺跡第 5 次調査で確認された後期前半の墓域の広がりを確認できた。								
土木工事の届出日		令和元年 6 月 26 日		遺物の発見通知日		令和元年 12 月 20 日 (1 文財第 1186 号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号						
久留米城 外郭遺跡 第26次調査	福岡県久留米市 城南町1番39		40203	031165	33° 19' 19"	130° 30' 32"	20200424 ～ 20200430	22㎡	確認調査	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
久留米城 外郭遺跡 第26次調査	城館跡	中世	溝 土坑		1条 1基		弥生土器、須恵器、土師器、 近世陶磁器、鉄器		16世紀の溝・土 坑を検出した。	
要 約										
調査地は、久留米城外郭遺跡の中央部付近に位置する。『延寶八年久留米市街図』では波瀬將監の屋敷となっている地点である。16世紀の溝・土坑が確認され、これまでの調査から周辺にも遺構が広がっていることが分かっている。また弥生土器も出土している。										
土木工事の届出日			令和2年4月21日			遺物の発見通知日		令和2年5月1日 (2文財第276号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号						
筑後国府跡 第299次調査	福岡県久留米市 合川町字田代 1194-5、1195-1、 1195-3、1195-8、 1196-1		40203	030112	33° 18' 55"	130° 32' 21"	20200527 ～ 20200529	19㎡	確認調査	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
筑後国府跡 第299次調査	集落 官衙	古代	溝		3条		土師器		古代の溝を確認 した。	
要 約										
調査地は7世紀後半代的大型四面廂建物が検出された第210次調査の南東側に隣接するが、当該期の明確な遺構は今回確認されていない。検出した3条の溝から土師器の細片が出土しており、古代に属するとみられる。2条の溝の走行方位が平行関係にあるため、道路遺構の可能性も想定された。しかし、道路遺構に伴う硬化面などは見られなかった。										
土木工事の届出日			令和2年3月30日			遺物の発見通知日		令和2年6月2日 (2文財第437号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号						
筑後国府跡 第300次調査	福岡県久留米市 合川町字沼尻 60-4、 60-10、60-11、 60-12		40203	030112	33° 18' 36"	130° 32' 24"	20200720 ～ 20200807	62㎡	確認調査	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
筑後国府跡 第300次調査	官衙	古代	溝 道路遺構 ビット	4条 1条 多数	土師器、黒色土器A類、 須恵器、平瓦		古代の道路遺 構を確認した。			
要 約										
調査地は、道路遺構が検出された第22次調査地から東へ40mの場所に位置する。道路遺構は東西方向に敷 設されており、側溝間は全面硬化されている。黒色土器A類が硬化面の補修痕から出土していることから、少な くとも9世紀後半以降に道路の使用を停止したものと考えられる。										
土木工事の届出日			令和2年7月2日		遺物の発見通知日			令和2年8月11日 (2文財第956号)		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地		コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
			市町村	遺跡番号						
筑後国府跡 第302次調査	福岡県久留米市 合川町字田代 1194-5、1195- 12、1195-13		40203	030112	33° 18' 55"	130° 32' 20"	20200803 ～ 20200807	20㎡	確認調査	
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項			
筑後国府跡 第302次調査	集落 官衙	弥生～ 古墳 古代	竪穴建物 ビット	1基 1基	弥生土器・瓦		弥生時代終末期～古 墳時代初頭の竪穴建物 1棟と時期不明のピッ トを検出した。			
要 約										
本調査地点は、筑後国府跡の前身官衙に隣接する。北側は、前身官衙の中心的な施設といわれる四面廂建物が 確認され、国史跡に追加指定されている。また、田代地区や西に隣接する古宮地区・大林地区一帯には弥生時代 終末期～古墳時代初頭の竪穴建物群が広がっている。今回の調査では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の所産と 考えられる竪穴建物を検出した。										
土木工事の届出日			令和2年7月20日		遺物の発見通知日			令和2年8月11日 (2文財第953号)		

令和2年度

久留米市内遺跡群

久留米市文化財調査報告書 第427集

令和3年3月31日 発行

発行：久留米市教育委員会

編集：久留米市 市民文化部 文化財保護課

印刷：赤穂印刷株式会社